青と赤の神造世界

綾宮琴葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
青と赤の神造世界

【Ｎコード】
Ｎ１５６０ＢＡ

【作者名】
綾宮琴葉

【あらすじ】
気が付いたら平原にいて「『魔法先生ネギま！』に転生！変更は認めない！」っていきなりじゃないかな？チートでも不老不死でも何でもＯＫとか言われちゃった。どうやら私１人だけじゃないみたいだし、ねぇちょっとは相談してみない？――この作品は二次創作です。クロスや多作品の設定は持ち込まず、神霊的な独自解釈と一部の原作改変があります。ネギまの歴史重視で進みます。一部の方に苦手な表現が出る可能性もあります。

第1話　神様に出会ってしまって（前書き）

処女作になります。
皆様の作品を呼んでいるうちに書きたくなってしまったため、投稿させていただきました。
大まかな構想はありますが、文章を起こすのは思っていたよりも随分と難しいのを実感しています。
ストック分を一気に掲載させていただきます。
長い眼で、どうぞよろしくお願いいたします。

第1話　神様に出会ってしまって

「――と、言うわけだからお前らには転生してもらう！」

……いきなり何を言っているのかな？

「拒否しても良いが、その場合は魂を浄化して記憶は消去。輪廻の輪に戻ってもらう」

気が付けば周りは地平線が見えるほどの平原、そこで小さな湖の前に私達は居た。先ほどから随分と横柄な態度の筋肉質の男が怒鳴るような声で説明をしている。

というか転生と言っているあたり私達はすでに死んでいる、と言う事？

「やっべぇ！転生キター！チート特典とかあるんだろ！？」

「これってあれよね！好きな能力もらい放題よね！？」

「ママ～？パパ～？きまらないよ～？」

「特典……、しかし状況しだいでは――」

目の前の男性は『神様』らしい、……チート？それって『最強系』とか言うやつなのかな？まさかこんな機会が巡ってくるなんて人生分からないなぁ～。って、あんな小さい子まで居るの？！転生とかチートとか言っても理解できないんじゃないかな……？

「チートも無敵も不老不死でも何でもありだ！もちろん原作介入もＯＫ！」

「原作ってなんだよ？まさかマンガとかゲーム！？魔法とか撃ちまくり！？」

え？ちょっとまって！そんな事したら話がメチャクチャになるじゃないのかな？

「ちなみに原作で起きた大きな事件は必ず起きる。妨害しても修正力が働くからな！」

――考えていたことが？！もしかして心を読まれた？！あ、説明の続き？

「ただし！持てる力にも限界があるからな！魂の強化はしてやるが、既存の生物をあからさまに無視する事は出来ない！」

ともかく考える余裕はありそう。あんな小さい子を放って置くのも目覚めが悪いし、声をかけてみようかな。

「転生先の世界は『魔法先生ネギま！』変更は認めない！」

ね、『ネギま！』？読んだ事はあったと思うけれど、結構危ない世界だったような？普通に考えたら学生に混ざったり、魔法使いの弟子になったり？……それよりもあの子を何とかしないとね。

「それじゃ！魔力はナギの倍！気はラカンの倍！不老の超命種でよろしく！」

あの人もう決めてるよ。そっちは放っておいてっと……。

（ねぇ、ちょっと良いかな――？！）

そう声をかけようとして声が出せず、その場から動くことも出来

ない事に気がついた。

（声が出ない？！）

驚いて声を上げようとするも相変わらず声が出てこない。何かおかしい……。そもそも私はどうして死んだんだろう？

ここに来る前を思い出してみようするものの、霞が掛かったように思い出せない。

「よし決まったな！じゃぁ泉に飛び込め！」

「おっし！行くぜ！」

なかなか爽快な音をたてて飛び込んでいく様子が見えた。

こんな短時間で決めていってしまうなんて、何も不思議に思わないのかな？

『自称神様』を見ながらも、必死に違和感の理由を考えるも纏まらない。考えている間に次々と飛び込んで行き、気が付けば私だけになっていることに気づいた。

「さてあとはお前だけだ！転生するつもりが無いのなら、輪廻に戻ってもらうぜ？」

――そ、それはイヤ！なんとか話を聞かないと！

「あ、あの、質問はしても良いですか？」

とっても笑顔が眩しい筋肉な『自称神様』。もうマッチョ神でいいや。それにそう聞いてみる。

「よかろう！何が聞きたい！」

よ、良かった。まだセーフみたい。違和感もそうだけれど、いつどこでどんな風に生まれるのか聞かないと！

「ええと、『ネギま！』の世界に転生するのは分かったんですけれど、原作のどの時代とかどこで生まれるか、どんな種族とかはそういう予備知識？とかが聞きたいのですが」

「おぉそうか！つまりお前は俺様の暗示が効いてないんだな！」

――――え？！暗示？ちょっとまって暗示って、何……。

「そうかそうか、さっきから妙に考え過ぎるやつだと思っていたが、なるほどな！」

そういうとマッチョ神は『壮絶な笑み』という類を見せてきた。

というか眼が笑ってない！こ、これってかなりヤバイんじゃないかな？！

「さっきから余計な事ばかりしようとしてるのが眼についたからな！黙らせて動けなくしていたんだが、なかなか楽しめそうだ！」

これは洒落にならない状況ってやつ？しかも体が動かないし、声も出ない。いや震えて何も出来そうにないんだけれど。

「というわけだから、お前は部下決定！」

――部下？部下ってどういうこと？！もしかして助かったのかな？でも、マッチョ神の部下ってそれはそれで凄くイヤな予感がするんですけれど……。

マッチョ神の顔をみてみるとニヤニヤ笑いに変わっていて、嫌な予感がどんどん加速していく。

「まずお前に『神核』を入れる！これは神、あるいは天使や眷属である証明だ！」

――『神核』？というか天使？普通に転生すら出来ないということかな？

考えていると、マッチョ神の右手から良く分からない色の光の玉が出てきた。

「これが『神核』だ！飲め！」

え？飲めって、どうやって？！

「早くしろ！口をあければ勝手に入る！」

う……。仕方が無い。このまま輪廻の輪に飛ばされるよりはましの様な気がするし、聞けなかったことも部下って事は聞ける機会もあるよね？

とりあえず両手でマッチョ神の右掌に浮かぶ光の玉を受け取ってみる。

あ、何か普通にもてた！あとは口元に持っていけばいいのかな？

「ごあ……。ぐぐぐぅ」

なんだか女子失格な声を出しながら、光は一向に動こうとしてくれない。

「こうやるんだ！」

そういうとマッチョ神は思いっきり口に光の玉を押し当ててきた。

「げほ！ごほごほ！」

思いっきり咳き込みながら光を飲み込んでしまった。

と言うか、何の味もしないんですけど！せめて甘ければ！光に甘いって無茶かなぁ～。

「よし！じゃあ逝って来おぉぉぉぉい！」

「――えぇ”？！」

考える暇もなく、私の身体を持ち上げると泉に向かって放り投げた。

バシャァァァァンと、激しい水音を立てて私の意識は暗転していった――。

第1話　神様に出会ってしまって（後書き）

1話目終了です。

第2話　目覚めてみれば

「あはは、ここってどこかな～？」

周囲を見渡してみる。回りは海。足元は岩場。以上。

――いきなりハードモードですか？せめて何か……、部下じゃなかったんですかマッチョ神。

「うむ！またせたな！」

「ひゃあぁぁぁ！」

唐突に背後から声がかかり、驚いて振り返ってみると、マッチョ神。

もしかして意外と良い人（？）なのかな？……と、とりあえず聞くだけ聞いてみないと！

「えっと、質問の続きってして良いですか？」

ダメかもしれないけれど、とりあえず聞いてみよう。聞かないよりはましだよね。

「よし！『神核』はちゃんと機能してるな！これから転生特典だ！ちゃんと受け取れよ！」

ダメだった……。このマッチョ神、全然人の話を聞いてないよ。あれ？と言うか今の私って人間なんだろうか？『神核』とか言うのが機能してるってことは、人間じゃなくなってるのかな？全然実感がわかないんだけれど。

「■§※★∴⇒∇△◎※％◆！」

うん、もはや理解不能。相変わらず何を言いたいのかまったく分からないマッチョ神だよね。

――そう思っていると海がまったく波立っていないことに気が付いた。

「何、これ……」

思わず呟いてしまうくらいおかしい。しかも海どころか世界中から色が失われていっている。白と黒だけの世界になったところで、マッチョ神は私の身体を再び持ち上げた。

「全ての光と闇の精霊ども！貴様らの神が命令する！――こいつと混ざれ！」

――な？！せ、精霊って、しかも全部？！

そう考えているうちに周りから白い尾を引いた光の玉と、黒い残像を残しながら闇色の玉が迫ってくる。

「ちょっと！何するんですか？！マズイんじゃないんですか？！」

もはや完全にパニック状態。いくら天使（？）だか部下だかになったとしても、全部とか正気かと！そうは思っていても、視界はもはや白と黒とマッチョ神だけになっている。

うぅぅ……なんて嫌な光景。あ、意外と余裕あるじゃない。

「問題ない！世界の時間は停止済み！地球と火星に行き渡らせるための神力も十分だ！」

世界の時間は停止って、伊達にマッチョじゃなかったんだ……。
そんな事を考えていると、どんどん私の手足の端から光と闇が入り込んでくるのが分かる。

「あぐ！やめ……あぁぁ！」

――痛い！

他の感情、思考が追いつかない。手足が砕けて再生してまた砕ける。手足が一通り砕けて再生したら次は胴体。頭。そして魂。意識を失うことも出来ず、集まった精霊の気配がなくなると同時に、私の身体も心も光の粒子となって空気中に溶け消えていた。

――――。

――――――――。

――――――――――――――――！

――光の精霊３柱！集い来たりて敵を射て！魔法の射手！光の３矢！

（『声』が聞こえる……）

――魔法の射手！闇の２１矢！

（呼ばれた様な……）

――――！

――――――！

――影の精霊７柱！集い来たりて敵を射て！魔法の射手！影の７矢！

（――私を、……呼んでるの？）

――――！

――――――！

――光の精霊１０１柱！集い来たりて敵を射て！魔法の射手！連弾・光の１０１矢！

（――やっぱり私を呼んでいる、デモ、ワタシッテナニ――？）

「適応完了。セフィロト・キー、『リライト』！」

――急に目の前が晴れてゆく。ここって何処だっけ。

「ごめんなさい！大丈夫？！意識はある？！」

――随分と心配している様な声が聞こえるけど。

「再構成は問題なさそうだけれど、どうも意識がはっきりしてないわね……。」

――再構成？何の事……？

ごす！

「いったぁぁぁぁぁぁぁ！いきなり何するの？！」

痛すぎる！なんか大きなハンマー持ってるんですけれど！何この人いきなり殴るなんて！でもこんな痛みってあのときに比べたら……。あの時？……あ。

「あぁぁぁぁぁぁぁ？！」

ごす！

「痛いってば！」

痛みに耐えつつ叩き続けてきた人を見てみと、何かすごい美人が居た。

「やっと気がついたわね。めんどくさい事になってるけれど、結果的にＯＫよね！」
「ＯＫじゃないです！何ですかいきなり！」
「助けてあげた割りには随分じゃないの？」
「え？！」

――助けてあげた？誰を？私？助けるって何から……。

「馬鹿マッチョからよ」

って、心読まれた？！またなの！

「まずは謝罪ね。本当にごめんなさい。二重の意味で貴女には迷惑をかけてしまったわ」
「二重ってどういう意味ですか？」

とりあえず、マッチョ神が１つなのは間違いなさそうだよね。もうひとつは何なのかな？

「２つとも馬鹿マッチョよ」

また心が読まれてる……。気にしたら負けかな？

「大丈夫よ。きちんと説明するわ。まず１つ目は、死者の魂が輪廻へ向かうときに勝手に連れ去った馬鹿の事」

勝手に……？あの転生っていきなりだと思ったけれど、そんな理由があったんだ。

「それから2つ目は、あいつが勝手に天使にした上に、セフィロトを使わざるを得ない状況になってしまったこと」

あ～～。やっぱり天使にされたのってまずかったんだ。そりゃ人間がいきなり天使とか神様とかになったら大変そうだものね。

「残念ながらすでに下級神よ」

「え～」

「え～、とか言わないの！」

でも下級神といわれてもね～。実感も無いし、やっぱり心読まれ……しまったまた負けた。

「ぶっちゃけ貴女が天使になっててもそこは問題ないの」

問題ないんだ？じゃぁ、どこが問題なのかな？

「馬鹿マッチョが創造したこの世界は、彼の『神核』で維持していたけれど、すでに処罰により彼は消滅しているのよ。けれども生まれてしまった世界自体を消すことは誰であろうと重い罪、世界を消さないためには馬鹿マッチョの眷族である貴女の『神核』を活性化して、管理を手伝ってもらうしかなかったのよ」

ちょっとまって、……相変わらず嫌な予感しかしないんですが、拒否権もなさそうだし。

「無いわね。さっきも言ったとおり世界を創造したら管理するのが神の義務。不条理ながら貴女にはすでに義務が発生しているわ」

「え～」

「え～、言わない！」

ごす！

痛ったい！ループですね、分かります。しかし世界の管理かぁ……。（意識の上では）さっきまで学生だったのに無茶振りするなぁ～。

「あとセフィロト・キーの説明ね」

「セフィロト・キー？」

「そう、まぁセフィロト、生命の力が乗せられれば何でも良かったんだけれど、この世界との相性の問題でね。鍵の形で『リライト』って魔法で再構成するのが一番適応しやすかったのよ」

『リライト』、……それって、なんとかっていう魔法世界の組織が使っていたような？

「そうそれね、問題はセフィロトの力は1つの魂に対して、生涯に1回しか使えないこと。分解された貴女を早期に再構成するには手っ取り早かったからと言うのと、馬鹿マッチョの『神核』のエネルギーを受け止める器まで一気に成長させる必要があったって事かしら」

何いいいい！マッチョ神を取り込だの？！それは生理的に無理！キモ過ぎる！

「拒否権は無いわよ」

……ですよねー。

「彼の人格は消滅して純粋な神力だけだから安心しなさい。再構成

したついでに神格も上がったことだし、天使名も命名しておいたわ。光と闇の精霊の影響で銀色だらけになっているから、貴女はシルヴィアね。階級の権天使≪アルケー≫をミドルネームに、今世では精霊体だから精霊信仰の『アニミズム』からとって、シルヴィア・A（アルケー）・アニミレスよ。頑張ってねシルヴィアちゃん♪」

――なんですとー？！

第2話　目覚めてみれば（後書き）

2話目終了。

第3話　そろそろ説明してください

「じゃぁまずはこれを渡しておくわ。あと貴女の管理者としての使命もあるからきちんとこなしてね」

本？丁寧な装丁だけれど……、転生の説明は無しなのかな？聞きたいこともあるんだけれど……。

「なにかしら？」

――そろそろ心を読むのを止めてください。とりあえず順番に……かな？

「えぇと、私のほかにも何人か居たと思うんですけれど、小さい子とかも居たし流石に私みたいな事になっていたらかわいそうだなぁって……」

成人していた人も居れば同い年くらいの人も居た。でも流石に子供はねぇ～。

「それも使命のひとつね。あなたの使命は大まかに3つあるわ」

3つ？管理が1つ目だよね。あの子を助けるのも使命みたいだし、あと1つはなんだろう。

「まず1つ目はこの世界を存続させること。天使として信仰を集めておくことをお勧めするわ。信仰がなくても死にはしないけれど今の時代ならヨーロッパに行くのがお勧めね」

信仰？！生き神様として崇められろと……。そんな器じゃないと思うんだけどな～。

「そして２つ目は、『セフィロト・キー』で貴女のほかの転生者の枷を外すこと。」

枷……？あの子にも何かされているってことかな？

「まず転生者は貴女を含めて５人。まだ他の子は１人も生まれていないわ。最初に生まれるのは２００年後に魔法世界≪ムンドゥス・マギクス≫ね」

魔法世界……？なんだかずいぶんファンシーなところだったりするのかな？

「ずいぶんかけ離れたイメージをしているみたいだけれど、わりと現実的で危険な世界よ」

あぁ……やっぱり、マッチョ神め……。

「そこは原作の問題ね。ちなみに貴女が付けられていた枷は『不条理』だから」

――え？！不条理？

「そもそも彼がどうしてこんな事をしたかというと、暇だったらしいのね」

暇つぶし～～～？！そんな理由で巻き込まれたの？！

「まぁ早くに亡くなってしまった貴女達が運をつかんだとも言えるし、不条理に巻き込まれたとも言えるわね」

うん、決めた。なるべく人助けをしよう。不条理を押し付けるのは良くないよね。あ、でもどこかの誰かが善意の押し付けはいらないって言っていたような……。だれだっけ？

「それで転生者達を『セフィロト・キー』で大まかな枷の取り外しと再構成すること。彼が見て楽しむために行われた転生だから、要望に対して曲解、あるいは歪な形で取り付けられているわ。さしあたって２００年後に生まれてくる子もそうなっているはずよ」

なるほど～。まずはその子の枷はずしかな。うん、頑張ろう！

「転生の時にかけられた枷はさっき渡した本を、本人の前で開けば分かるようになっているわ。近くに行けば本が反応するから、それで探すことね」

ふむふむ。どんな枷をつけられたか想像したくないなぁ～。やっぱり不幸とか？

「それじゃぁ３つ目ね。地球に関しては彼が光と闇を集めてくれたおかげで、幸いにも命の循環に影響は無いわ。『神核』を押し付けて傍観するつもりで居たみたいね。問題は火星にある魔法世界よ」

火星？！魔法世界って火星だったんだ……。それよりも火星に行くなんてロケットとか？そんなの作れないし、持ってる国にお世話になるしか無いのかな？

「魔法世界へ行くための転移ゲートが世界のあちこちにあるから問

題ないわ。特に熱心な宗教関係者には魔法使いが関わっているから、信仰集めにはもってこいよ」

……。天使様を演じろってことかな？騙すようで気が引けるなぁ～。

「だますも何も天使じゃないの」

……。そうでした。うーんとりあえずはヨーロッパに行って――。

「思考がそれているみたいだけれど、魔法世界での最終的な目的は『造物主』のもっている『グレートグランドマスターキー』を食べること」

……食べる？鍵を？光の玉といい精霊といい、何だか変なものばっかり食べてるよね……。いい加減普通のご飯がたべたくなってきたな～。

「とは言っても、物語の大きな出来事は必ず起こるわ。そのため２００３年の夏に魔法世界で大きな戦争があるのだけれど、その戦争で『造物主』を必ず倒すこと。これは貴女が倒しても主人公が倒しても問題ないわ。その後は『造物主』の所有物という設定が無効化されて、管理者である貴女の所有物になる。」

２００３年？２００年後にあの子が生まれるとして、今何年なのかな？何だか嫌な予感がするんだけれど……。

「食べるというのは物理的なものではないわ。比喩。私たち神族にとって人間的な食事のイメージは持たないほうが賢明ね。食事は出来るけれど食べたそばからマナに還元されるから、消化とかは無縁

ね。そもそも貴女にも物理法則は当てはまらないから慣れる事からはじめなさい」

とりあえず２００年の間は、身体を慣らして、教会に接触、あの子を助ける。になるのかな。

「最後になるけれど本の説明ね。まず表紙を開いてみて」

えぇと、……『シルヴィアちゃんの取扱説明書♪』

「なにこれぇぇぇぇ！」

私の取扱説明書って何？！転生者を探す本じゃないの？！

「貴女、自分の体のことや魔法の扱いとか解る？そのあたりどうなっているのか初級から中級魔法の教本をかねた説明書よ。もちろん『セフィロト・キー』もその本の中に入っているわ」

そうですね……。そもそも自分の体って今どうなってるのかな？天使って事は翼が生えてたり？

「はい、鏡」

そういうと姿見がどこからともなくいきなり出てきた。普通にチートだなぁ。いや、魔法なのかな？

「……え？！」

「そんなに喜ばなくていいわよ♪」

だれこれぇぇ？！顔は面影があるような気がするけれど、明らか

に私じゃない！すっごく可愛くなってる！それに確かに銀色だらけだね……。
髪は銀色のロングだし、紫の瞳も光の加減で銀っぽく見える。今まで気にならなかったけれど銀色の翼がちゃんとある！って、意識したら何だかむず痒くなってきた？！

「むぁわわわわ！」

混乱気味にがむしゃらに翼を動かしはじめてしまった。
――何だか余計に変な感じが！

「おちつきなさい」

ごす！

「痛った！」
「おちついたかしら？とにかくヨーロッパに移動するから手を出しなさい、引っ張るから飛びながら慣れること。いいわね」

そ、そんな無茶な～！

考える間も無く手を引かれ、その場から飛び立った。

第3話　そろそろ説明してください（後書き）

3話目終了。

第４話　魔法は初心者！

はい。そんなわけでヨーロッパです。現在は西暦１１００年くらい。最初に『ネギま！』につれて来られて精霊（中身は天使だけれど）になってから、１８００年ほど無意識で精霊に溶け込んでいたようです。気が付いたら年齢だけはおばあちゃんを遥かに超えてるって……。うん、あまり考えないようにしよう。

容姿については、「天使様やるんだから見目麗しいほうがいいでしょ！」と一蹴されてしまいました……。まー、確かにそうなんだろうけれど～……。嬉しいと言えば嬉しいんだけれど自分じゃなさ過ぎて微妙。

今居る場所は、とにかく森。森。森。大事なことなので３回言いました。助けてもらった女神様（現在の上司らしい）に連れられて、森の中まで飛んできて（飛ばされてきて）家だけは作ってくれました。現代風のベッドルームとリビングにバスルームのサービス付き！現代人に中世とかの生活は厳しいです！洗濯機が無い！って言ったら服は魔力で編まれてるから汚れないそうです。白か黒のゴシックドレスしか無いんですがいぢめですか？白はともかく黒で天使しろって無茶ですよね！

それから翼が邪魔です！って言ったら無理やりぐいぐい押しこまれて、見事に消えました！出せる自身はありません！

なんだかんだとやり取りした女神様は、「じゃ、あとは頑張りなさい」って帰ってしまいました。しまった、名前を聞いてなかった～。マッチョも知らないけれどもう居ないらしいからそっちはいらないかな。上司らしいし、また会う機会もあるよね？

「とにかく説明書の確認かな。何が出来るかわかっておかないと信

用も何も得られないよね」

『シルヴィアちゃんの取扱説明書♪』とか、１ページ目に底抜けに明るい字で書かれた本を読んでみないことには始まらないし。

「どれどれ～っと」

――シルヴィアちゃんの取扱説明書♪を、簡単に説明すると。

・本は自身の魔力で構成してあるので、念じると体内にしまうことが出来る。

・転生者が生まれる年代に近づくと表紙裏に大まかな情報が出る。転生者の前では本が発光する。

・本は『セフィロト・キー』を使い終わった時点で消滅する。

・『セフィロト・キー』は裏表紙に手を当てて召還する、ただし転生者４人分まで。

・魔法発動体を介せず精霊を集合させて魔法を使える。詠唱は必要だが始動キーは要らない。ただし光と闇はその限りではない。

・身体を損失しても再構成できる。応用すれば大きさも変えられる。

・翼の分解と再構成による出し入れが出来る。

・特定の相手を祝福できる。ただし光か闇限定。

・仮契約を行うと、従者は半精霊化する。実質不老。
・本契約を行うと、従者は眷族になる。実質不老不死。

なんだか、随分とチート仕様な気がしてならないんだけれど、大丈夫なのかな……。とりあえず、契約とかは慎重になろう。あの神様みたいな事はしたくないよね。

「時間は有るんだし、練習！外で色々試してみようかな」

ともかく静かな森の奥。人も来なさそうなくらい深いから魔法使っていてもそうそうばれなさそう。

「えぇと、教本の部分は～……、あったあった、後ろのほうのページだね」

――魔法初心者は灯火から♪魔法少女なイメージでレッツトライ☆

「これは……。本気にして良いのかな？」

うさんくさいなぁ……。もうちょっと読み進めてみよう。

なになに、魔法をは理論・実践・制御で成り立っている。精霊を扱うための理論が完璧でも経験が無ければ扱いは上手くならない。また制御が疎かであれば集められる精霊も少なくなり、実際の効果も薄いものとなる。

「なるほどねぇ～。魔力だけはたくさんあるみたいだけれど、練習しないとダメですってことだね。どこの世界でも勉強は必要か～」

・魔法理論編は、○○ページから

・魔法制御編は、○○ページから

「実践編は細かく書いてないし、やってみるしかないかな～？」

とりあえず灯り？なら危険はなさそうだし。せっかく魔法の世界にいるんだからちょっと憧れるよね♪

「プラクテ　ビギ・ナル　火よ灯れ！」

ゴオォォォ！

「うひゃぁぁぁぁ！」

何かたき火が出来たんですけど！どういう事？！灯りじゃないの？

「って、このままじゃ火事になっちゃう！水みずミズ～～～？！」

バシャァァァァ！

「冷たい……。水浸しになるほど集まらなくてもいいのに～」

外でやっていて良かった……。こんな事になるなんて。相性が良い光か闇からはじめたほうが良いのかな？

「えぇと…闇は危なさそうだし、光の魔法にしよう」

・攻撃魔法

集めた精霊の数の分だけ『魔法の射手』を放つ初級魔法。状況に応じて連弾や収束を使い分けられる応用性がある魔法。

・防御魔法

自分の周囲に張り巡らせる魔法障壁と、任意の点や面に収束させる魔法の楯がある。

……。どう考えても楯からだね。攻撃魔法はヤバイ！灯りがたき火になったり、消火したいだけで水浸しになるんだし攻撃は危険だよ！

「えっと、自分の周囲に楯があるイメージで……。光の障壁！」

って、まぶしいいいいい！なにこれ！あたり一面光っていて何も見えないよ！もしかしなくてもまた威力がありすぎるっことかな？

「か、解除～！おしまい～！」

そういうと、精霊が解散してくれたようで普通の景色にもどってくれた。

「これはダメだなぁ～。制御が出来てないお手本みたいな気がするよ……。当分は制御の勉強だね」

あ、翼の出し入れの制御も出来るようにならないと。課題が山積みだなぁ～。魔法ばっかり夢中になってついつい忘れてたよ。まだまだ人間のつもりだし、いろいろ慣れないといけない事が多そうだね。

そういえば私のほかの転生者も人間じゃない種族で生まれてきたりするのかな……？探すときは気をつけないと……。

第４話　魔法は初心者！（後書き）

４話目終了。

第４．５話　説明と主人公の設定１（ネタバレあり）

・作品の設定について

あらすじにも書いてあるのですが、神霊的なものや、『魔法先生ネギま！』の設定の独自解釈と一部の原作改変があることをお断りしておきます。基本的には歴史に沿って原作重視で進みます。

神様の設定に関しては、最上位クラス以外は天使としています。御使いとして世界を管理するという形です。堕天使は悪魔の一種という扱いです。悪魔だから純粋悪というつもりはありません。原作から逸れてオリジナル天界編とかはやらないつもりです。

基本的に群像劇になる予定ですが、１話の間に視点変更をあまり多く入れたくはありません。

大まかな流れは考えてありますが、行き当たりばったりで細かく考えていない部分もあり、「ここはこうだろう！」という詳しい質問には答えられない事をお断りしておきます。

主人公の初期設定（４話終了時点）

名前：シルヴィア・Ａ（アルケー）・アニミレス

誕生：紀元前７００年頃生まれ（発生とも言う）

性別：女性

身長：１５８ｃｍ（マナの調整で変化可能）
体重：物理的な重さが無い。（生前は秘密）
種族：精霊（神格は権天使）

【外見】

見た目は生前と同じ１６歳程度。
青い地球と赤い火星の管理なら混ぜればいいじゃないと勝手に紫色の瞳にされた。
光と闇の精霊の影響で、銀色の腰まであるストレートヘア。光の反射でアメジストの様にも見える。
色白で西洋寄りだがアジア系にも見える顔立ち。美人ではなくどちらかと言えば可愛い系。
背中に半透明の銀色の翼が左右二対ある。そのうち出し入れ可能になる。

【特徴】

マイペースでどこか楽観的、その割に責任を感じやすい真面目タイプ。
精霊であるため、ウェスペルタティア王家の『魔法無効化能力』と相性が悪い。
（触れただけで分解されたりはしないが、集めた精霊を散らされる、という意味で。）
生物的な構成が無いため気を使えない。代わりに神力が循環している。

【能力】

・精霊の集合
上位の精霊として、魔法を詠唱と自身の魔力だけで行える。
ただし光か闇はその限りではない。

・再構成
精霊が存在できる場所ならば自身を再構成する事ができる。
魔法や物理的ダメージを受けても『神核』は上位世界の存在なので
致命傷にならない。

・精霊の祝福
光か闇に限定されるが対象者の親和性が上昇する。

・精霊の加護（仮契約）
契約を行った従者の魂を半精霊化。対象者の得意な属性との親和性
が大きく上昇する。
超命種になるが、契約破棄により契約前の種族にもどる。

・天使の加護（本契約）
契約を行った従者を眷属化。対象者には神核が生まれ精霊（下級天
使）化する。
肉体ではなく魂的なもので生物でなくなるわけではない。つまり肉
体を失わなければ気は使える。

シルヴィアの設定の中でおそらく活かさない部分も有りますが、
作っていて矛盾を含みそうな部分は細かく書きました。

なるべく初期設定を守るようにしますが、設定の追加・若干の修正はあるかもしれません。
原作知識はうろ覚えになります。そう言えばこんな事もあったなぁ～。と言う程度です。

第４．５話　説明と主人公の設定１（ネタバレあり）　（後書き）

ここまででプロローグは終了です。

第5話　魔法使いへの道

・魔法制御編

魔法の制御を安定させるためには、明確なイメージ。効果の対象をはっきり確認すること。魔法の結果を強く思う事。魔力の収束を洗練すること。

「う～ん……。具体的なんだけれど、魔力がよく解って無いから、抽象的に聞こえちゃうかな～」

こんな事なら、マンガをもっとちゃんと読んでおくんだった……。でも転生なんてすると思わなかったし。人生何があるか分からないね～。魔力に関してなにか書いてないかな～？

・魔力認識・神力認識編

ぺらぺらと捲っていると、都合良いページを発見！

「作為的なものを感じるけれど、分からないとどうにもならないよね。まずは見てみないと」

魔力には体内を循環するものと自然界に存在するものがある。体内魔力だけではなく、自然のものを効率良く取り込むことで、大きな魔力を得ることが出来る。

神力は神族にとって生命の循環を促すものであり、天界と世界と神核を巡る永久機関である。

「……神様無理です。わかりません」

何だか前段階から話がずれている感じがするな～。あ……！もしかしてこれが『不条理』？！枷は外してもらったから、もう無いはずだけれど、そのせいにしたくなるくらい意味が分からないよ。
あ、でも神力は何となく分かるような？こっちは生きるためのエネルギーって事だよね？無くなったらヤバイ感じがするけれど、永久機関って事だから、え？もしかして死なないのかな？
そういえばマッチョ神が処罰を受けて消滅って言っていたよね。……つまり、うん、あまり深く考えないことにしよう……。

「それじゃ魔法というか、魔力を使えるようにしないと！やっぱりイメージかな？」

イメージトレーニング開始～！魔法自体はダメダメでも使えていたし、弱い威力になるように頑張ろうかな～！

――あっという間に１０年が経ちました。

とにかく毎日イメージトレーニング！光楯を使ったり光の障壁を使ったり、ときどき闇属性の障壁も使ったけれど攻撃魔法はあまりやらなかった。集中してどこに出すのかどれだけ出すのかを頑張りました！とにかく魔力の感じを掴むのが大変でした！
その結果、障壁だけなら割りと自在に出せるようになりました！頑張ったよ私！

「でも、これだけで天使様～って崇められたりはしないんだろうなぁ～」

崇められるって分かりやすい奇跡が必要だよね……。なんだろう？守りも必要だと思うんだけれど、やっぱり奇跡の生還！とか、病気が治った！とか？そういえば、攻撃と防御魔法の他の魔法はあまり見てなかったなぁ……。いけないいけない、ちゃんと見ないと。

そういえばお腹が空かないんだよね。ちょっと悲しいけれど空腹で倒れないって言うのはありがたいよね。口が寂しいから数年前に湧き水は見つけました。どこからか分からないけれど水とお湯が出てくるバスルームよりはおいしいお水でした！そっか、今の時代だと食事事情もあまり良く無いんじゃないかな？美味しい料理が作れたらその辺も評価してもらえるかな？！

――って、本題を忘れそうになったよ！

「えっと、他の魔法の種類は～……っと」

・治療魔法
外傷を治療する魔法。術者の魔力や技量によって治癒できる範囲は変動する。魔法具や薬草等を併用すればその限りではない。

・飛行魔法
飛行の補助を行う媒体を使い、浮遊・高速移動を行う。魔力制御と運用しだいではその限りではない。

・強化魔法
戦いの歌による自己の強化。魔力の循環により打撃力・防御力を飛躍的に上昇させる。
また、契約者に限り魔力供給を行うことで同様の効果を得られる。

「契約……！」

思わず息を呑んじゃったけれど、これは良く考えてからじゃないとダメだよね。私みたいに巻き込まれちゃう人が増えちゃうって事だもんね。

やるならやっぱり治療かなぁ……。薬草の知識は無いけれど、勉強できるところは無いかな？

あとは飛行かな。これは翼を上手く使えれば補助を行う媒体ってものはきっといらないよね？

――さらに１０年が経ちました。

うーん、意識の上では３０代後半か～。見た目は１０台半ばだけれどね。１８３０台だって？そんな声は聞こえません。

そうそう、回復魔法の術は森で怪我した動物とか木々とかで試しました。自分にかけようにも自傷するわけには行かないし、普通の生き物と違うから効果がちゃんと出なさそうなんだよね。

強化魔法を試しみたら使えませんでした。魔力を纏ってパワーアップというか自分自身が魔力で出来てるのに気が付いて、意味が無いって事で……。

飛行魔法はまだぎこち無いけど、しばらく飛んだり浮かんだり出来るようになりました！翼でばさばさ動くと格好良いのかもしれないけれど、集中が途切れます！羽が４枚もあるから腕が６本あるみ

たいな感じなんだよね。正直全然慣れません。でも天使様を演じないといけないからそろそろこっちを練習した方が良いかもしれない。
あとは眠りの魔法とか補助的なものを中心に、やっぱり攻撃魔法は少しだけかな。

「よし！善は急げって言うし、今日からしばらく翼を出したまま生活してみよう！」

あ、なるべく白いほう着てよう、雰囲気も大切だよね～♪

第5話　魔法使いへの道（後書き）

5話目終了です。

第6話　任務は危険と隣り合わせ

私はメガロメセンブリアから極秘裏に派遣された調査隊を預かっている。今回の任務は数十年前から、旧世界≪ムンドゥス・ウェトゥス≫で何度か観測された巨大な魔力である。

旧世界にあるという聖地で観測されたならばまだしも、ヨーロッパ地方の『黒の森』と呼ばれる巨大な樹海である。ならば何らかの儀式が行われたか、力の有る鬼神・悪魔が召喚された可能性が有る。

しかし、それなら数十年に渡って何度も観測されたにもかかわらず森に異常は見られず、また周囲での大きな事件も報告されていないのだ。これを異常事態と言わずしてなんと言うべきか。

任務において最優先とされるものは、魔力の原因の確認。次に生存して報告。出来れば確保、あるいは討伐。我々がバックアップをする旧世界の組織ならともかく、他所の組織に握られるわけにはいかないのだ。最悪の場合、他の組織と出会えば戦闘もありえるだろう。

「隊長。今のペースならば。早朝には黒の森にたどり着きます」

「よし。他の組織に警戒を回しつつ、森の手前で休息を取る」

「了解！」

現在私が率いている部下は2人。相手の交渉も考慮した上で精鋭を用意し、男2女1の編成である。交渉が出来る相手がおり、有利な契約を交わせれば上等。最低でも情報は握りたい。しかし現実的に考えるならば、儀式跡と何らかの組織・グループの痕跡程度であろう。

「隊長。野営準備完了しました」

「ご苦労。結界を張りつつ交代で見張りに付く」
「了解！」

さて、早朝には森に入る。どこまで探索が可能だろうか。魔力反応は幸いにもほぼ特定の範囲である。我々の足ならば、半日もかからずにたどり着くだろう。

あたし達はわざわざ旧世界に来ている。こちらでは大きな声で魔法を使えないし、暗躍する魔法団体も数が多すぎる。今朝、調査の目的地に到着。ちょうど黒の森内部の探査指定範囲に向かって駆け出している。

正直なところめんどくさい。旧世界の事なんだからそっちで勝手にやってほしい。

「まったく。なんであたしが……」
「口を閉じろ、コードエイト」
「はーい」

ぼやけばすぐこれだ。隊長は固すぎるのよね。コードネームエイト、それが組織でのあたしの名前。隊長はデルタ。割とまじめなもう一人の隊員はセブン。数字の名前なんて華もあったもんじゃないわ。いい加減仕事変えようかしら。かといって裏組織にいる身。簡単に変わったり出来ないのよね。

「そろそろだ、警戒を怠るな」

「了解！」
「はーい、了解」

目的地に着いたもののやっぱり森が広がっているだけにしか見えない。探査魔法をかけてみるものの、何かの儀式の痕跡は感知できなかった。

「このポイントは終了。次のポイントへ向かう」
「了解！」

次……、ねぇ。今も魔力反応は無いんだし、儀式跡でも見つかるかどうかってレベルじゃないかしら。

「次のポイントだ、北北西へ１ｋｍ進む」
「了か……？！」
「え？！」

寒気がした。唐突に巨大な魔力の気配。これは明らかにヤバイ。こんな魔力人間が出せるレベルじゃない、それこそ鬼神やヘラスの守護聖獣でも目の前に居るかのよう！

「た……隊長、どうしますか？！」
「あ、あたしは帰りたいな～、なんて……」
「馬鹿者！調査する絶好の機会でしかない！」
「り、了解！」
「了解！」

冗談じゃないわ。こんなのと対面するのなら反逆者扱いでも逃亡したほうがマシってものよ！けれど魔力反応はかなり近い。急に出た辺りもしかしたら待ち構えられていたのかもしれない。

一瞬、死が頭をよぎったけれど、あたし達は行くしかなかった。

なんという事だ。調査隊には精鋭を連れてきたはず。たとえ敵対組織や大量の召還魔が居たとしても、反撃しつつ好転、あるいは逃走は可能だと踏んでいた。しかしこれほどの魔力では無事に逃げ切るのはまず無理だ。最悪の場合は私自身が囮となり、報告を部下に任せる事になるだろう。

「隊長！反応捕らえました。西に１００ｍです」
「よし。私が先行する。エイトは私の後方に。セブンはこの場で待機して観測。最悪の場合は即座の逃走の準備を」
「了解！」
「観測準備開始します！」

覚悟を決めるしかなさそうだ。そう思いつつじわじわと歩みを進める。正直、息が詰まる思いだ。魔力からは害意が感じられない事がせめてもの救いだろうか。
そうしているうちに念話の魔法が届いた。

（こちらセブン！魔法障壁の展開が確認できます！かなりの魔力です！）
（了解した！）

魔法障壁だと？これだけの魔力を障壁だけに使っているとは考えにくい。障壁を張った中で何かを行っていると考えるのが自然か。

いやまて、ならばなぜ結界ではなく障壁？おかしい。何者かが居るのは確定だが、怪しすぎる。

ガサガサ――！

――！しまった、別の組織が居たか！どうする、現状で動くのは危険すぎる

「――魔法の射手！氷の７矢！」

「ぐっ！」

「きゃっ？！」

しまった、手前を凍らされた！これでは先に動くのが遅れる！逃げればみすみす原因もどこの敵対組織かも解らないまま終わる！

「――契約に従い　我に従え　氷の女王　来れ　とこしえのやみ　えいえんのひょうが！」

氷結の封印魔法か！まずい！この距離では巻き込まれる！

（――セブン！今すぐ逃走を……？！）

（隊長？！何が！）

パアァァァァン！

くぅ！あちらの障壁が解除されたか！あれだけの魔力障壁だ、上級殲滅魔法の封印術を防いだか。しかしやつらの後衛がすぐやって来るだろう！この機に逃げるしかないか？！

「――来れ風精　光の精　光りに包み　吹き流せ　光の奔流　陽光の息吹！」

何？！原因の方から反撃？障壁を張っていた魔法が解けたにしては建て直しが早すぎる！！あちらは何人い――！馬鹿な！少女１人だと？！

少女に見入っているうち、敵対組織と思われる者たちは光に包まれ、遥か遠くへ吹き飛ばされていた。

第６話　任務は危険と隣り合わせ（後書き）

６話目終了です。

現在のストックはここまでになります。
次話は、推敲と矛盾点の確認しつつ、ストックを溜めてから投稿となります。

※１月４日魔法に対する補足を追加。
シルヴィアが使った「陽光の息吹」に関しては、「雷の暴風」を参考に、勝手な解釈に基くオリジナル魔法です。
攻撃魔法に対して遠慮があるため、得意な光で拘束、風で吹き飛ばして怪我をさせたくないという考えから、この様な形を取りました。

第7話　魔女狩り（前書き）

思いのほか筆が進んだので、再び連投になります。

第7話　魔女狩り

「我々は蒼の騎士団である！【黒森の白魔女】よ！我らの裁きを受けよ！」

そう宣言した男は大剣をかざして中央に立ち、魔法使いと思われる数名の男達は杖を持って魔法を詠唱し始めた。

どうしてこうなったのかな……？

色々な魔法を使えるようになったのは良いんだけれど、変な団体が来るようになりました。

別に悪い事はしてないよね？森の奥で魔法の練習をしているだけだし、森から出てもいない。翼の練習はしてるけれど、まだ派手な事はしないほうが良いって思っていたから、コッソリとしてます。いつの間に魔女認定されたのかな？

このままじゃまた問答無用で襲い掛かってくるし、魔法障壁張って諦めてもらおうかな。

「光の障壁」

自分を囲んで姿を隠すようなイメージで呟くと、私の周りに光の魔法障壁が展開される。

とりあえずこれで凌いでいたら諦めてくれると嬉しいんだけれど、また魔法で脅したりしないと帰ってくれないかなぁ……？

「――雷の精霊27柱！集い来たりて敵を射て！魔法の射手！連弾・雷の27矢！」

パシィ！

魔法の射手を波状攻撃して来るけれど、今の私の障壁ならそれくらいは効きません！最初に襲われたときは加減が解らなくて、最初に魔法を使ったときみたいに物凄い魔力で障壁張っちゃったけれど、防御に関してはこれくらいかな？――というのは、少し分かるようになってきました。

魔法使いの人たちは何とでもなりそうだけれど、騎士っぽい人はどうしよう……。普通の剣じゃ突破されないけれど、魔法使いが居るから多分普通じゃないよね？

「――氷の精霊７柱！集い来たりて敵を射て！魔法の射手！魔法の射手！氷の７矢！」

……え？こっちじゃなくて別の方向に？何で向こうに撃って、……ってまた別の団体が居るよ！あの人達に攻撃したって事は、仲間じゃないんだよね。どうしよう、挟み撃ちにされちゃうと困っちゃうし、でもあっちの人たちは何だか困ってるみたい……。

「――契約に従い　我に従え　氷の女王　来れ　とこしえのやみ　えいえんのひょうが！」

え？何それ聞いた事無い魔法。氷河とか言ってるから、大きな氷の魔法って事かな？

さすがにマズイ――？！

パアァァァン！

――キャ！し、障壁が吹き飛んじゃった！どうしよう！とにかくあの人達はどっか行ってもらわないと！なるべく吹き飛んでも傷つ

けないイメージで……！

「来れ風精　光の精　光りに包み　吹き流せ　光の奔流　陽光の息吹！」

しっかりとした声で魔法を唱える。淡い光が蒼の騎士団とか言う人たちを包んで拘束、吹き荒れる風が騎士達を舞い上げて彼方へと飛ばした。

「魔女めぇぇ――――！」

うわー……。飛ばされる時まで魔女認定してくれなくてもいいのになぁ～。諦めてくれないかな？まだもう１つ団体が居るしどうしようかな～。やっぱり魔法障壁をもう一度張ろうかな？

「ねぇ……。ちょっと良いかしら？」

「あ、ハイ？」

……あ！思わず返事しちゃった。

「エイト！勝手に接触をするな！」

「でもこの娘は無害そうじゃない？ぼけーっとした感じで」

無害認定もらえた！この世界で会った人で初めてかもしれない！というか私はぼけーっとして無いよ！してないよね……？

「まぁ良い。失礼お嬢さん。少しお話宜しいか？」

もしかして襲ってくる団体さんと目的が違う？この人たちも怪しいけれど、悪い感じはしないし、問答無用で攻撃してこない分話は

出来そうだよね。あ、しっかりしないと。ボケッ子認定されちゃうのはイヤかな。

「はい、何のご用でしょうか？」

ちょっと硬かったかな？相手が居て会話をするのも久しぶりだし～♪

「我々はこの森で過去数十年に渡り、大きな魔力が何度も観測された原因を調査に来た。お嬢さんが魔法使いであるのは解るが、何か特殊な魔導具を持っていたりしないだろうか？」

バレてる……？というか観測って？魔法を使うと魔法使いには分かっちゃうんだ……。

隠れていたのは正解かもしれないけれど、これじゃ魔法の練習をどこでしていても同じって事じゃない……。それで魔女狩りって団体が来ていたんだね～。

何て答えよう。真面目そうな人だし、正直に話したほうがいいのかな？

「えぇと、私はこの森で魔法の練習をしています。魔法の練習をしているだけで、特に何かを見つけたり迷惑をかけたつもりは無いですよ？」

魔導具って何かな？私の本に書いてあった『魔法発動体』とか言うやつ？そういうのは持って無いし要らないって書いてあったと思うんだけれど。

「ふむ。それならばお嬢さんの魔力が異常に大きいだけなのだろう。他にこの森で練習する者や集団を見たことは無いだろうか？」

「集団ならさっきみたいにいきなり襲いかかってくる人達をたまに見たくらいです。問答無用なんで防御魔法を使って逃げたりしています」
「ねぇ貴女。さっきから随分軽装に見えるけれど、こんな森の深くまで飛行媒体や野営道具とか持ってきてないのかしら？獣の対策もしてるように見えないのよね」

あれ？なんか疑われてる？何か変な事言ったかな……？

「えぇと……私はここに住んでるんでそういうのは要らないかなぁって……」
「「住んでる？！」」

そんな声を重ねて驚かなくても良いと思うんだけれど。確かに森の奥だけれど、住もうと思えば住む人居るよね？自然派志向の人とか、世捨て人とか。

「つ、つまりお嬢さんは、この森には詳しいと？」
「え？私の家がある周辺くらいですけれど、一応湧き水とか分かりますよ？」
「ねぇ、『魔法発動体』……。持ってるように見えないのだけれど、どうやって魔法を使ったのかしら？」

え？『魔法発動体』って魔法使うのに必要なの？要らないって書いてあったから特殊なものだって思っていたんだけれど、もしかしてまずいのかな？
って、このおじさんあからさまに警戒した顔になってる！本当にヤバそう！

「まさか儀式で転化した魔女だっていうの？冗談じゃないわ！」

「待てエイト！落ち着け！」

冗談じゃないのはこっちです！初めて無害認定されたと思ったら結局魔女ですか！理不尽じゃないかな！とにかく魔女じゃないって説明しないと！

「あの！私の場合『魔法発動体』ってのが要らないって書いてあって！」

「書いてある？！」

「どういう事よ！」

ああぁぁ！何だかますます泥沼になってきたような！

「隊長！遅くなりました！観測結果出てます！」

「セブン？！待機を命じたはずだ！」

「戦闘終了してる様子なのに、指示無し、連絡無しじゃ様子も見に来ますよ！」

「……む！たしかに」

観測？調査に来てるって言っていたから、何かを調べてたんだよね？何を調べたのかな？

「それでセブン。わざわざ現場に来るほどか？念話で済むだろう」

「それが結果を見る限り戦闘になったら、かなりの危険と判断しまして、最悪の場合は間に入ろうと思い……」

「――！結果から言え」

「了解！結論を言うと、そちらの女性は『精霊系亜人種の様に見える何か』という事が分かりました！」

精霊系亜人種？

確かに人間じゃないって分かってるけれど、何だろう……なんか、悔しいな……！

第7話　魔女狩り（後書き）

7話目終了。

第8話　亜人の様に見える何か

「『精霊系亜人種の様に見える何か』だと？」
「はい。しかも観測された魔力のパターンは一致。この女性が原因であるかと」

原因？知らないうちに迷惑かけたいたのかな？もしかして襲ってきた団体って、何か迷惑をかけた原因を解決しに来てたのかな……？

「なるほど……。つまりお嬢さんが数十年前から魔法の修行をここで行っている……と。確認だが間違いないだろうか？」
「……え？ハイ。してました」

あぁ、どうしよう。知らないうちに迷惑をかけて居ただなんて。初級魔法が出来るようになった時にもっと森の外もちゃんと見ておくんだった……。どうしよう。

「順番に確認をしたい。どうか我々の話を聞いてもらえるだろうか？」
「はい……」

そう言うしかないよね。迷惑かけていたならちゃんと謝って、それからどうしよう。

「まず、ここで魔法の修行をしていた理由は何だろうか？必要ならば、学院や教会など連絡を取る手段はあるはずだ。『魔法発動体』が要らないと書いてあるという発言も気になる」

『魔法発動体』ってやっぱり重要なものなんだ？とりあえず魔法の練習の理由は……何だろう？使ってみたかったって言うのもあるし、信仰集めのための準備？

「えっと、『魔法発動体』は私の先生みたいな人から、無くても問題ないって言われました。魔法は憧れとか必要だったから練習していただけで、これからやら無いといけないこともあるし――」

「目的があるのか？」

うわー。何かまた一層警戒した顔をされちゃったんですけれど！もうどうしようこれー！

「精霊系も何も、亜人種が旧世界≪ムンドゥス・ウェトゥス≫に居る時点でおかしいのよ！あいつら魔法世界≪ムンドゥス・マギクス≫から出ようとしないし！」

「エイト！勝手はするな！」

「あー、もう！分かりました！」

人型の精霊って魔法世界にいたんだ……？向こうに行ったらこそこそしなくていいのかな？

「すまない。率直に聞くが、お嬢さんは”何”だ？」

何って言われても……。どうしよう。天使です！って言ったら頭がおかしい人って思われるかな？そもそも魔法世界には普通に亜人が居るって言っていたよね？あれ……？ちょっとまって！

「あの、もしかして貴方達は魔法世界の方ですか？」

「何の事だ……！」

あ、動揺してる。魔法世界って現実的で厳しいって言っていたけれど、むしろよっぽどファンタジーな気がするよ。

「我々が何者か説明したら、お嬢さんの正体を明かしてくれるか？」

うーん……。信用第一だよね。迷惑かけていたならちゃんと謝りたい。人間関係は良くしておきたいかな。信用してもらえるように話してみよう。

「はい。説明してくれたら、私もちゃんと話します」

「……了解した。まず私は、魔法世界にあるメガロメセンブリアから派遣された、魔法調査隊の隊長だ。コードネームで失礼するが、デルタと言う。」

「同じく隊員のエイトよ」

「セブンです」

「えっと、シルヴィアって言います」

コードネーム！秘密組織とかが使ってるイメージだね！あれ？っという事は魔法世界まで迷惑かけてたって事？こ……これはヤバイんじゃないかな？！

「ご、ごめんなさい！」

日本人よろしくとばかりに思いっきり頭を下げて謝罪！

思わず謝っちゃったけれど、許してもらえるかな？！

「はぁ……？」

「何をいきなり謝ってるのよ」

「え……？魔法使った事を怒りに来たんじゃないんですか？」

あ、あれー？なんか呆れられてる？ちょっと違ったのかな？謝り方が間違えてた？魔法世界式の謝り方ってどうやるんだろう！

「シルヴィアさん。我々は原因不明の魔力の原因を調べに来ただけだ。怪しい集団の策謀や、テロリストでもなければ咎める理由も無い。どうか頭を上げてほしい」

勘違い？でもそれじゃ謎の団体達って……。

「え、でも、いろんな人たちが魔女っていきなり襲って来たから、何か悪い事をしてしまったのかと思っちゃいまして……」

「それは旧世界の冒険者や団体が、名を上げたり政治利用するために始めた魔女狩りの余波だろう。魔法を使っているだけなら、どこにでもいるぞ」

え、冤罪ーー！！まさかそんな理由だったなんて……。中世の魔女狩りの酷さは歴史の教科書には載っていたけれど、自分がその立場になってみると随分と無茶苦茶だったんだね～。

「我々の説明はこんなところだ。次は君の番だが？」

「あ、はい。でも、信じてもらえるかどうか……」

「まず、話すだけ話してみてくれ。我々としても疑問はあるのでね」

それじゃ翼を出して、説明……かな。魔法世界の人たちだったら、ゲートっていうのも貸してもらえたりしないかな？

集中して翼を出すイメージ。天使の姿に――！

「え？！」

「馬鹿な……」

「隊長！幻術や魔導具の観測はありません！」

やっぱり驚いてるよね……。
翼に飛行魔法を意識して浮かび上がる。
演出は大事という事で～。信用してもらえないかな？

「えっと、こんな感じなんですけど。人間じゃないのは確かです」
「魔族……では無いのだろう？悪意の有る波動は感じないし、何より透き通る銀の翼など聞いたことが無い」

魔族？あ、やっぱり悪魔とか居るんだ？魔法があって神様とか天使が居る世界だものね。悪魔とか居たって不思議じゃないのかな。今はそっちは置いておいて、私の事の説明だよね。

「一応天使……です。使命があってこの世界に来たんですけれど、それの準備のために魔法は練習してました。地球と魔法世界のどちらにも用事があるので、魔法世界の人とちゃんと話をしてみたかったんです」

信じて……もらえるかな？奇跡的な事はまだ出来ないけれど、ある程度は魔法で何とか出来ると思うんだけれど……。

「隊長。あたし軍を抜けます」
「ハァ？！」
「エイト！いきなり何を言い出す！」
「シスターになります。と言うかこの子マジ天使」
「え～」

な、何この人。態度変わりすぎじゃないかな？

「だって魔法隊の任務はもう飽き飽きしてたのよね。どうせ隊長だ

ってこんな爆弾見つけて放置する気はないでしょ？だったら私達の息がかかった教会に匿って、連絡を密にしてもらうのが有益なんじゃないかしら？」
「それはそうだが本人の前で策略を暴露するな！」
「イヤよ。だって私この子に味方するってもう決めたの」

無茶苦茶だ～～！

「と言うわけだからよろしくね？天使ちゃん？」

そう言うとエイトってコードネームの女性が腕に手を絡めてきた。

第8話　亜人の様に見える何か（後書き）

8話終了。

第9話　森からの旅立ち

何この状況……。

「へぇ～。天使の翼ってこんな風になってるのね。一般人に紛れ込んでいても分からないんじゃないかしら？」

わさわさ。

「く、くすぐったいから止めてもらえませんかーー？！」

この人本気触りだよ！今まで誰も居なかったから触られたこと無かったけれど変な感じ！

「イヤよ。こんなにサラサラした翼なんて、高級な羽ペンでもなかなかお目にかかれないわ」

わさわさわさわ。

くぅ……！このままじゃ遊ばれて終わってしまう！絡み付いてるこの人を何とかしないと！って、翼をしまえば良いじゃない！忘れてたよ私！

くすぐったいのを我慢して集中。人の姿に……！

「あぁ！」

何ですかその凄く残念そうな顔は……、可愛く膨れても出さないものは出しませんよ！

「と……とりあえず、話を続けてもいいだろうか？」
「ハイ。すみません」
「エイト、離れろ」
「イヤよ」

この人変り身が早過ぎるんじゃないかな……。隊長さんもっと怒ってやってください！

「エイトが先に言ってしまったが、我々としては大きな魔力の原因を味方に引き入れたかった。結果的に１人の女性、いや天使であったというべきか。解ってもらえるだろうが、宗教的・世界的な影響力は計り知れない」

うん、そうだよね。教会の人とかから見たら、天使様がやってきました！我らに導きを！奇跡の御業を！とか言われそう。

「我々魔法世界の影響力は、イングランド王国内のメルディアナ学校にある。十字教の影響力もあり、天使としての影響はそれこそ王を抜くものにもなりかねない」

ですよね～。嫌な予感がしたんだ。ぜったい利用されるよね……？というか、宗教ってこの時代は、かなりの影響力があった様な……。

「出来れば我々とメルディアナまで来てほしいのだが、問題は無いだろうか？無ければ向かい正式に協力内容を詰めたい」

無い……よね？信仰集めは必須らしいし、魔法世界の組織とも仲良くなれそう。次の転生者が生まれてくる１３００年頃に魔法世界

に行ける様にしてもらえれば良いし、この隊長さんと仲良くなれば利用されないように上手く考えを助けてくれそう。あとは～……。あ！女神様に作ってもらった家！

「はい、メルディアナってところに行くのは大丈夫です。ただ、私の家が置き去りになってしまうのでそちらをどうにかしたいって思うんですけれど」

「ならば結界魔法で封印を行うと良いだろう」

結界？そんな魔法は私の本に書いてなかったよ？封印とかもあるんだ。危険なものもありそうだし、色々教えてもらおうかな～？

「えっと、結界とか封印とかの魔法は知らないのですが、どうすればいいのでしょうか？」

そういうと何だか変な顔をされてしまった。

あれ？そんな変なこと言ったかな？

「我々が最初に接触したときに『こおるせかい』の上級殲滅魔法からの封印術を、君が吹き飛ばした連中が唱えていた。結果的に魔法障壁だけで相殺されていたが、君ほどの魔力でなければ今頃まとめて氷の中だ」

えええぇ？！あのとき結構ヤバかったんだ……。防御魔法の練習をしておいて本当に良かったよ……。氷付けにされたままどうなっていたか分からないものね！

「ともかく家を結界で覆って、認識阻害と影の魔法で隠せば問題ないだろう。君の魔力を楔として打てば封印完了だ」

認識阻害？影で隠すって言うのはなんとなく分かるけれど、また知らない魔法が出てきたよ。

「すみません、認識阻害って何ですか？」

「認識阻害の魔法は、例えばそこに有る物を無いと思わせたり、違う場所にあると思わせる魔法だ。隠したい物や人、暗示にも使われる」

なるほど～。って暗示とか言われるとマッチョ神を思い出すな～。でも必要そうだし習っておくだけなら損はなさそうかな。

「分かりました。家まで案内しますから、その魔法を教えてもらえますか？」

「了解した。しかし初めて使う魔法を、一朝一夕で組み合わせる事は普通は無理だ、なので我々が魔法の陣を作る。最終的な魔法の発動と楔打ちの魔力供給だけは君に任せる」

「はい、お願いします」

うん、色々魔法が混ざってるみたいだし、イメージも出来ないからそこはまかせっきりかな。魔力を出して楔を打つ？ってだけならちゃんとイメージ出来そうかな。

「とりあえず、そろそろ腕を放してもらえませんか？」

「イヤ☆」

星を飛ばされました……。

「えぇと、ここが私の家になります」

私達は場所を移動して、女神様に作ってもらった家の前に居る。なんか変な目で見られてるんだけれど、どうしたのかな？

「随分と変わった家ね……、なんというか前衛的？」

「見たことが無い壁ですね。何で出来ているのだろう」

散々な言われようだ……。

別に変な家だと思わないんだけれどね～。これくらい普通じゃない？リビングとベッドルームとバスルームのちょっと良いホテルみたいな感じ。一軒家なんだけれど、西洋風だし何かおかしいのかな？

「ふむ……。きっと天使から見たらこれが普通なのだろう。封印術をかければ楔を抜くまで出入りは出来なくなる。何か必要なものがあれば今のうちに取り出しておくのをお勧めするが？」

やっぱり変らしい……。う～ん、取り出しておく物って言っても本は体に入れてあるし、服は天使様やるなら黒いほうは要らないよね？

「特には無いかな～。無くても困るものはありません。家には生ものもありませんから」

なんかまた変な顔をされてしまった……。今度は何だろう？

「ねぇ天使ちゃん。結構上等なドレスを着てるけれど、森を抜けるんだし外套とか無いのかしら？メルディアナへ行くまでに汚れるわ

よ？」
「あ、このドレスって汚れたりしないんです。家にあるのは色違いだけですから、天使として偉そうにするなら真っ白のこれだけで良いかな～、なんて」
「よ、汚れない……？！」
「何でも有りなのね～」
「偉そうに……か。まぁそうだな。ククク……」

むぅ……。笑われてしまった。しかも呆れられている様な？これじゃ、信仰を集めたり威厳とかには無縁になりそうな予感が……！

「問題無いなら魔法の準備だ、セブンは影で覆え！エイトは認識阻害の上乗せを！結界は私が担当する！」
「「了解！」」

そう言ってテキパキと作業を始めてしまった。
どんな手順かも分からないほど手早い様子で、もう終わったのかこちらに近づいてきた。

「それでは仕上げに『魔法発動体』になっているダガーを渡す。ダガーを抜けば魔法は解除されるが、君の魔力ならば他の者は抜けないだろう。何も考えずに思いっきり魔力をこめて、玄関前に突き刺してほしい」
「はい！」

受け取ったダガーに魔力を流しながら、無心でダガーを振り下ろした。

第9話　森からの旅立ち（後書き）

9話目終了。

第１０話　証明は難しい

頬に当たる風が心地良い。
今私達は、イングランドを目指して空を飛んでいます。隊長さんたちは町の宿に預けていた荷物を背負って箒に乗っています！私はホワイト系のフード付き外套を買ってもらいました！飛ぶ時は翼に当たるからしまってもらったけれどね！
しかし、森を抜けて１０ｋｍくらい進んだら町があったなんて……、森を出たら出たでやっぱり目立つ事になっていたのかな。町に行ってもこの時代のお金は無いんだよね！

「ふむ、認識阻害の魔法は問題ないようだな」
「あ、はい。大丈夫だと思います」

そう、飛ぶとき明らかに目立つ私に、認識阻害は覚えたほうが良いって教えてもらいました。基礎だけど、魔力が大きいからひとまず問題は無いそうです。隊長さんと隊員さん達も認識阻害を使っているから、一緒にいれば相乗効果でまずばれないみたい。

「そろそろイングランド上空だ。他の組織や貴族領の問題もある。集中してメルディアナを目指す！」
「「了解！」」
「はい！」

貴族かぁ～。普通に転生していたら憧れたのかもしれないけれど、今の身体だったらむしろ絶好のターゲットだよね？天使的な意味も見た目的な意味も……。フード生活は必須になりそうだなぁ～。

とりあえず問題が起きる事も無く、無事にメルディアナって所に着きました。翼を出したままだと目立つという事で、近くの森に下りてフードと外套を装着。報告の時に天使の姿になってほしいと言われました。

「調査隊帰還しました！」
「コードデルタ！任務ご苦労。してそちらの者は？」
「こちらは謎の魔力を発していた本人です。観測データと本人の確認も取れています。これから内容は詰めますが協力体制をとる約束は取り付けました」
「了解した。会議室を使ってくれ。他には何かあるか？」
「事はメルディアナだけで済みません。現在の最高責任者を会議に呼んでください。後々はメガロメセンブリアとの協議になるでしょう」
「なんと！……責任者には貴官ら以外の護衛も付ける事になるが？」
「問題ありません。むしろ上の立場の目撃者は多いに越したことは無いでしょう」

何だか随分と話が大事になってる気がするんですけれど～？それにしても偉い人のやり取りって肩が凝りそうな話し方だよね。なんだか別の世界の会話に聞こえるよ。

「それでは会議室までご足労願いたい」
「はい」

とりあえず無難に返事をして隊長さんの後を付いていく。

「わしがメルディアナの支部長になる。わざわざヨーロッパの内陸からようこそ」

出た……！いかにも魔法使い！って感じのお爺さんが目の前に居ます。

「調査隊も任務ご苦労。して、報告を聞きたい」

「了解しました。まず我々は黒の森と呼ばれる場所にて探索を行い。原因不明の魔力と同じパターンを発する女性との接触に成功しました」

「女性？小柄だとは思っておったが女性だったか。それから？」

やっぱり話し方は仰々しいね～。もうちょっと軽く話せないのかな？こんな話し方って、天使様を演じる時は覚えないといけないのかな～？

「はい。他組織と言いますか、冒険者による魔女狩りや名上げ行為を行う集団が、上級殲滅魔法と封印術を行おうとする現場に立ち合わせました。しかし彼女の魔法障壁はその一撃を防ぎきり、即座の反撃による勝利でした」

「ふむ、魔法使いとして十分な実力があるということか」

「本質的な彼女の評価はそこではありません。むしろそこからが本番です」

「む？何があった？」
「シルヴィアさん、準備をたのむ」
「はい」

呼ばれたので外套を脱ぎ、横にくっつく様に立っていたエイトさんに預ける。
なんだか見た目だけで随分注目されてしまってるけれど、正直そこに感心してほしく無いな～。自分でこの容姿になったんじゃないからね～。
とりあえず集中。翼を出すイメージをとる。天使の姿に……！

「これは！」
「なんと！」

魔法使いのお爺さんも、一緒に居る偉い人も驚いている。一度私の姿を見たことがある隊長さん達はあまり気にして無いようだ。
訂正。エイトさんだけは視線がおかしい。むしろじっくり見られてる。今触るのは止めてくださいね？

「……天使。だそうです」
「天使？！」
「馬鹿な！」

やっぱり簡単には認められないよね～。証明って言っても何か方法は無いかなぁ～？

「彼女の魔力パターンは観測されたものと完全に一致。また魔法世界≪ムンドゥス・マギクス≫の精霊系亜人にも似た魔力ですが明らかに別物。そもそも彼らは魔法世界から出たがりません。また、半透明の銀の翼など聞いたことがありません」

「なるほど……のう……」
「しかし、証拠も無いのに天使とは言えないのではないか？」
偉そうな人が反論してるけれど、その気持ちはわかるよ。私だって自分がこうなってなければ『天使です』なんて言われても、頭大丈夫ですか？って聞きたくなるものね。
「ふむ……ならば天使らしい力は持っておるか？」
「……力？ですか？」
「うむ、我々人間や魔法使い、魔法世界の亜人では出来ない事は無いかの？」
うーん……。光の精霊と闇の精霊を集められるとか？あとは私の本とか……。服が汚れないのは魔法で出来たりするのかな？
「彼女には使命があるそうですが……。その関係で何らかの力は無いだろうか？」
やっぱり光の精霊をたくさん集められるってのが良いところかな？思いつく事を言うだけ言ってみようかな。
「えぇと、光の精霊をとてもたくさん集める事ができます。あとは着ている服が神力でまったく汚れません。あとはちょっと変わった本が取り出せます」
「服の事はここに来る間にまったく汚れず破れない事は確認したが、光の精霊と本というのは初耳だ」
「あ、はい。私は光の精霊をたくさん集められるので魔法も簡単に使えます。本というのは私の使命に関係するものです」
やっぱり無理がある気がするなぁ。

「なるほどの。とりあえず光の精霊を集めてみてくれんか？」
「はい」
それじゃ防御魔法のイメージで……。ただ集まるだけで良いから力を貸してほしい……！
「こ、これは……！」
「なんと？！」
その瞬間、初めてこの世界に来たときの様に、白い尾を引いた光の玉が視界一面どころか世界を塗り潰すくらい集まっていた。

第１０話　証明は難しい（後書き）

１０話目終了。

第１１話　メルディアナの日々（前書き）

本日はここまでになります。

第１１話　メルディアナの日々

という訳で絶賛シスターさんのお手伝い中です！

あれから結局、『天使だと思われる』という認識をされました。だって本物の天使なんて見たことが無いから分からない。なんて結論でしたよ……。

でも本当に天使なんじゃないかって認められたのは、光の精霊を集めた事じゃなくって生活の中での出来事でした。

「天使ちゃ～ん♪食事にしない？」

「あ、私ご飯食べる必要ないんですよ」

って、何気なく言ったら変な目で見られた。

「やせ我慢してたりするのかしら？それとも私達と同じ食事は口に合わないとか？」

「ち、違いますよ！本当に食べる必要が無いんです！」

怪訝な顔をされてしまったけれど、１週間くらい飲まず食わずでお手伝いしていたら、これは本物なんじゃないか？って、周りから見られるようになりました。上層部の人は監視を付けていたらしくて、その辺りからも情報が流れているようです。

一緒にご飯食べられないのが寂しいから、せめて食堂には来ない？って言われて付いていったら、本場の紅茶を発見！ここぞとばかりに飲んでいたら、食べられるんじゃない！って怒られてしまった……。

それからシスターメアリーとは何度かお茶会をするようになりました。メアリーはエイトさんです。あれから洗礼を受けて本当にシ

スターになっちゃいました。というのは表向きで、魔法世界からのお目付け役兼教育係だそうです。任務上いろいろな経験があるため、貴族的で優雅な振る舞いを覚えなさい！との事です。

「ほらそこはもっと作り笑いをして！手はもっと華やかに！」

「抽象的で分かりません！」

そんなやり取りをしながらも何とか礼儀とか作法とかを練習して、紅茶の飲み方も注意されつつ、シスターのお手伝いの日々を送っています。

そうそう、メルディアナの偉い人たちとの協力体制は、こんな感じになりました。

1、メルディアナ魔法学校と対等な関係であり、メガロメセンブリアへの協力は依頼という形で行う。

2、メルディアナはシルヴィア氏の身柄の保護と悪意のある噂の対処を行う。代わりに『天使』として仕事を行い、教会の布教の協力。また戦時においては祝福の儀式をとり行う。

3、魔法組織からの有事の際には、魔法使いとしての協力を教会より優先して行う。メルディアナはその存在を秘匿する義務がある。

4、イングランド王国と敵対しない。ただし、イングランド側からの一方的な攻撃が行われた場合はその限りではない。

5、これらの契約は、同氏の使命が遂行される１３００年まで有効とされ、謝礼として魔法世界≪ムンドゥス・マギクス≫へ送り届け、以後の行動は詮索しない。

こんな感じになりました。
デルタ隊長さんからは、随分と譲歩された内容だと驚かれました。
実質、協力体制をとっていれば拘束力は無いし、ボランティアが多いくらいなのかな？色々と勉強する機会もあるみたいだし、何より魔法学校！知らない魔法や、薬草の勉強をしたいって言ったら、先にお嬢様になりなさいと怒られました……。だからってポエムとかも勉強する必要はありますか？厳しいよメアリーさん。

――それから数ヵ月後。

私の偽お嬢様も板についてきたという事で、イングランド王国の国王様。ヘンリー1世と貴族達に、教会の天使として挨拶に出る事になりました。
女神様から貰ったドレスの質がいいという事で、そちらをメインに教会関係者という事で過美にならない程度に十字架のペンダントと装飾品。長い髪は結い上げて翼を見せるための演出を行うという事です。

「陛下、本日の謁見は教会の大司教殿と、例の天使殿になります」
「天使か。教会の狗はどんな見世物を手に入れたのやら、良い！通せ！」
「ハッ！」

ギィィィ――！

重たい音を立てて、謁見の間の扉が開かれる。
大司教さんを先頭に数名のシスターと私は国王陛下の前に姿を現した。

「……なんだ小娘ではないか」
「ほう、これは中々……」

隠す気も無い品定めの視線と声が聞こえる。
うぅぅ……。見世物になるのは分かっていたけれど、結構ツライなぁ～。いけないいけない、顔を引き締めないと！

「良い。大司教、顔を上げよ。発言を許す」
「ご尊顔を拝しましては、光栄にございます。本日は――」

帰りたくなってきたよ……。今は大司教さんが挨拶をしてるけれど、次は私の番になる……本当に帰りたくなってきた。

「そなたが噂の天使殿とやらか？」

来た……！

「良い。面を上げよ、発言を許す」

それを聞いて顔を上げる。それから膝を折って身を屈め、淑女の挨拶をとる。周りの貴族は礼を取った事に安心した様子を見せるがその隙に周囲に光の精霊を呼び込み、翼を広げて臣下では無い言葉を紡いだ。

「お初にお目にかかります国王陛下。わたくしは天使シルヴィア・アルケー・アニミレス。神より使命を受け教会に舞い降りました」

あぁ、貴族さんが明らかに怒ってる。でもすぐ隣の人は情けないくらいに腰を抜かしてるなぁ～。やっちゃったって顔をしてる貴族の人も居る。あ、衛兵さんが警戒して王様の横についた。それはそうだよね～。

「ふっ！はははは！どんな教会の狗が来るかと思ったが！ここまで本物らしいものを連れてきたか！ふはははは！」

「へ、陛下！笑い事では！」

「良い！ここまで出来るならばかえって説得力がある！旗印にもよかろう！」

なんかウケてる？笑わせるつもりはなかったんだけれど、王様の考えって分からないなぁ～。

「シルヴィアと申したか御使い殿。それで我らに裁きでも与えに来たかな？」

「わたくしの使命は世界を育む事。そして悩める魂を救う事です。イングランド王国の方からの一方的な暴挙が無い限り、敵対することはありえませんわ」

「ほう……」

そろそろいっぱいいっぱいです。元一般人に王様の相手はツライですよ！

「あいわかった！ヘンリー1世の名に誓って、御使い殿の救済の命を違えないと誓おう！ならば御使い殿は我が国のためにお力を裂くのであろう？」

「ええ、契約に従い１３００年までの間、この地に留まり力を添える事を誓いますわ」

とりあえず付け焼き刃は終了。大司教さんが始終にこにこしていたし、後ろに付いてきたメアリーはにやにやしてるし。早く帰りたいです！

――それからは色々ありました。

偽お嬢様教育が終わったので、メルディアナの資料で上級魔法や結界魔法。認識阻害とか隠匿に気配遮断。魔力の気配が大きすぎるから力を使うと居場所が分かるっていうので、魔力をもっと制御したり、隠れたりする勉強をしました。もちろんこの世界の薬草の勉強もしたけれど、魔法世界のほうが研究はもっと進んでいると言われました。

それからまた何年かすると戦争が起きて、騎士団長への光の精霊の祝福。結果的に勝利したけれど、私の力が戦争を勝利に導いた力の１つだって事が中々に重いです。

私自身も実は暗殺されそうになりました。簡単には死なないけれど、実際に襲われるのは怖いです。魔女狩りの時以来、久しぶりに攻撃魔法を使う事になりました。他の魔法組織からの攻撃だったので、結果的にメガロメセンブリアの魔法部隊が報復。その組織は壊滅したそうです。

１３００年までの間１６０年以上イングランドに留まりました。デルタ隊長さんもメアリーも亡くなりました。二人とも最後まで色んな事を教えてくれて、組織の人と付き合うにはこういう所に気をつけろだとか、遠距離魔法は問題ないけれど懐に入られた時の対処とか。生物的な肉体が無いから鍛える事は出来ないので、いまいち身に付かなかったけれど、二人の事を忘れずに練習していきたいと思いました。

そして最後の契約の年が終わり、魔法世界のメガロメセンブリアへ。魔法隊で良くしてくれる人を頼りながら、立場上貴族街の修道女寮に移住しました。

第11話　メルディアナの日々（後書き）

11話終了です。

第2章はここで終わりになります。

章タイトルを、「修行とお仕事見つけました」から変更しました。

良く考えたら見つけるも何もすでに仕事は決まっていた事に気づきました（汗）

作中で紅茶が出てきますが、年代的にはまだイギリスには無いようです。

しかしイギリスといえばやっぱり紅茶のイメージがあるので、あえて引用しました。

イングランド王室で魔法を使って見せるのは、王室があくまで一般人だからです。

『ネギま！』的に王室の暗部や教会の裏関係者ならば知ってる人も居るであろうと思われますが、一般人ならば光の魔法と天使の翼があれば信じるのではないでしょうか？

という訳で、またストックを溜めてから新章開始になります。

第１２話　望まれた命（前書き）

３話＋設定２。連投になります。

第12話　望まれた命

「――と、言うわけだからお前らには転生してもらう！拒否しても良いが、その場合は魂を浄化して記憶は消去。輪廻の輪に戻ってもらう」

戻るも何も輪廻の輪から掻っ攫ってきたんだがな！神と言っても暇なくせに義務ばっかりとやかく言いやがる！

「やっべぇ！転生キター！チート特典とかあるんだろ！？」

この男は良いな！願望を表に出して、物事を単純にしか考えられなくなる暗示をこの空間にかけてあるが、ここまで思い通りだと気分が良い！

さて、どんな願望があるのか見てみるか。

・英雄「ナギ・スプリングフィールド」と「ジャック・ラカン」にガチ勝負でフルボッコ！

・ハーレムでうはうは！

・不老長寿で強靭な肉体！

「それじゃ！魔力はナギの倍！気はラカンの倍！不老の超命種でよろしく！」

くっくっく……！笑いがとまらねぇ！こいつ典型的な猪突猛進タイプだな！良いぜ望みはかなえてやる！ただし『曲解』した結果にしてやるけれどな！せいぜい足掻くのを楽しませてもらうとしよう！

「よし決まったな！じゃぁ泉に飛び込め！」

「おっし！行くぜ！」

バシャアァァァァン

本当に何も考えずに飛び込んだな。まあ気づいてからのお楽しみってやつだ！

さて、次だ次！今度はどんな願望を見せてくれるのかねぇ……！

「おっし！行くぜ！」

やっべぇ！わくわくが止まらねぇ！待ってろよ英雄ども！俺が格の違いってやつを見せ付けてやるからな！筋肉神にはあえて言わなかったが、麻帆良のハーレムはオレがもらう！ネギの野郎の仮契約ハーレムにはもったいないぜ！

バシャアァァァァン

お！意外と冷たくない！これで意識があんて―んってやつですか！

――暖かい。

ここはどこだ？真っ暗で何も見えないし体も動かねぇ。まだ生まれてないのか？

暖かいな……。しばらく様子見って所か……。

――ゴンゴン！

なんだ？！まだ何も見えないぜ！

いや、身体はなんとなく動くな……。

この叩く様な音はなんだ？胎内でこんな音はしねぇだろう？

「ギェェェェェェェ！」

うお！何だこの声！生まれる前からやべぇんじゃねぇのかよ？！

助けろ筋肉神！

やばいやばいやばい！動け俺！

バリバリィ！

「キュルルルル！」

え?！何だ！何の声だ！身体は少し動くが何も見えねぇ！
って、何だ?何か旨そうな匂い……、って、赤ん坊がいきなり物食うかよ！

もぐもぐもぐ

勝手に食うな俺！ちくしょうなんだよこれ！

「キュルル！」
「ビィィィィ！」
「ギェェェェェェェ！」

なぁ……まさか……人間じゃないのかよ?！
俺、筋肉神になんて頼んだっけ?思い出せ！

『それじゃ！魔力はナギの倍！気はラカンの倍！不老の超命種でよろしく！』

そうだ！魔力や気は英雄に勝つために2倍！あとは不老の長命種！って種族を具体的に頼んでねぇ！馬鹿じゃねぇ俺！
長命種って言ったら何だ?！何がある?！『ネギま！』の世界は魔法使いが隠れている地球と、ファンタジーな魔法世界だ！地球にあんな泣き声の生き物なんて居たっけか?オオワシとか?しかし鳥じゃ魔法とか気とか使えねぇよな?そう考えると魔法世界≪ムンドゥス・マギクス≫か……。やべぇ詰んでねぇ?

「キュルル！」

（くっそーーー！）

あ、この声って俺か！こんな泣き声しか出ないのかよ！　考えろ！長命種で飯が貰えてこんな鳴き声の生き物……！

――モンスター？、魔獣？、怪鳥？、竜種……？！

くっ！モンスターだったら本気で詰んでるな！魔法が使えるはずだから、せめて喋れるだろう！そう考えたら魔族的なやつか？！魔獣が妥当な気がしてきたな……、やべぇモテねぇじゃん……。

とにかく今はメシだ！成長しない事には何もできねぇ！餌くれ餌ぁぁ！

――数ヵ月後。

もぐもぐもぐもぐ

肉最高！今日も母竜が餌を運んできてくれたぜ！おう！俺ドラゴンだった！やったぜドラゴン！これなら長命種の中でも最高峰だ！生きるのには問題ないし！餌も母竜が持ってきてくれるから順調に育ってる！早く成長して人間になる魔法も使いたい！

それにしても魔力や気ってどう使うんだ？気は気合だよな？ラカンが「気合だ。気合さえあればなんでも出来る！」って断言してやがったし。ちょっと気合入れてみるか？

「キュルー！」
（うぉぉぉぉぉぉ！）

「ギェェ！」
「ビィィィィ！」

うは！何言ってるか解らねぇ！ただ何となく気合で出せたな。ドラゴンなんだから気さえ出せば生きていけるだろう。……あれ？俺なんか忘れてねぇ？

――さらに数ヵ月後。

やばい……。眼が見える様になってきてから気づいた。俺明らかに成長遅い。
何でだ？他の兄弟達はもう翼で飛んだり、母親について狩りに行ったりしてる。俺はまだ巣穴でたまに餌をもらえるかどうかだ。気が使えるから兄弟が狩ってきた餌を横から食えるが、このままだと狩りにもいけねぇ……。

どうしてこうなった！考えろ俺！筋肉神は何をしてる！

『魔力はナギの倍！気はラカンの倍！不老の超命種！』だろう？！

……あ！まさか！俺成長しねぇ？！
不老ってそういう事かよ！やべぇ！マジで死亡フラグだ！ドラゴンっていったらでっかくなってなんぼだろう？！ちっこいままじゃ襲われたら終わる！

うん……？そういえばドラゴンって成長割と早いのか？他の兄弟は結構ごっついよな？
緑の鱗に竜らしい角、たくましい腕と爪。尻尾も力強くて、翼は雄大に見える……。
母竜はどうだ？……意外とほっそりしてるな。しなやかってやつか。翼は何だか品があるな。女王様ってか！それにしても俺の身体って成長遅ぇ……。

――それからさらに2ヵ月後。

……俺捨てられました。死亡フラグが完成！
母竜と兄弟達とはどこかに飛び立った後は行方は分からない。
育たない子はいらないらしい。自然の厳しさを生まれて1年足らずで勉強しちまった！
一応は、しばらく前の兄弟と同じくらいには育った……ただし、俺……雌竜でした……！
冗談だろう！って何度も他の兄弟と見比べたりしたけれど、母竜との共通点の方が多くて……。これじゃ人間に変身してうはうはどころじゃねぇよ！それ以前に死亡エンドかよ！

「キュ〜」
（何だよこれ！）
やべぇ、怒鳴ったら腹減ってきた……。このままじゃマジで死ぬ。狩りもいまいち教わってねぇし、幼体の竜が１人で生きていけるほど魔法世界は楽じゃないはず……。
ちくしょう筋肉！ラカンに会ったらまずはフルボッコだ！それまで生きてたらだがな……。
バサバサ！
知らない羽音が聞こえる。
え……？何だ？俺を餌にしに来たのか？これで終わりか……。
――絶望色に染まった顔を上げると、そこに天使が居た。

第１２話　望まれた命（後書き）

１２話終了。

第13話　出会い

――魔法世界≪ムンドゥス・マギクス≫に移住してから数ヶ月。

魔法世界は『魔法』って名前の神様が居るみたいです。

『天使？へぇ～そうなんだ～。』

……って、割と軽かったので逆にびっくりしました！こちらでは魔法がどれだけ使えるか。それから貴族や議員といった偉い立場に居るか。そういうのが重要みたいです。

力と権力って、ちょっと薄情じゃないかな……？

そんなわけでメガロメセンブリアの修道院で仲良くなった人達におしまれつつ、立場上お金だけはあったので、なるべく貴族の人たちに干渉されず、教会上層部の影響も少ない土地と家を買う事になりました。家より庭が広くて、下級貴族みたいな感じ。これでほとんどお金は無くなっちゃいました！

これからは転生者探しです。

私には使命があるからあまり家には居られないと言ったら、教会のシスターを中心に奉仕活動という名目で、見習いシスターの教育や庭で魔法の練習をしても言いという事を条件に管理してもらえる事になりました。

何だかお世話になってばかりです。こっちは中世の地球と比べて食料や器具が発展しているので、お礼に未来の料理を披露したら、こんな食べ物見たこと無いと不思議がられながらも喜んでもらえました。

「それでは行ってまいります」
「貴女の使命に神の祝福があらんことを、私達は皆祈っていますわ」

そんな言葉で見送られて、飛行と認識阻害の魔法を纏って魔法世界を飛び回ってます。
探し続けるのに、疲れ難くてお腹も減らないって言うのは便利だよね～。

そしてある山間部にさしかかった時――！

「本が光ってる……！」

という事は、こんな山の中にあの子が居るって事かな？
マッチョ神は本当に酷い事をするなぁ……。今迎えに行くからね！
本の光具合を頼りに山の上空を飛び回る。

「……あ！光が強くなった！こっちの方かな！」

どんどん強くなる光を頼りに、山肌にある洞穴に降り立つ。
え……？ドラゴン？！しかも何だか弱ってる！ええっと、本の表紙裏の情報は……。

・名前　無し　設定可能

・種族　ウィンドドラゴン　女性

・転生特典

魔力強大、気強大、老化し難い、成長晩熟、長命種。

・枷　『物事を曲解』された転生特典

なにこれ……！マッチョ神は真面目に願いを叶えなかったって事だよね？！

……見た感じあまり成長していないから、凄く弱っているって事かな？

あの子は小学生くらいだったと思うから１０歳くらい？まずは人間形態になれるように再構成するのは絶対！竜種って言うのはアドバンテージだから、変身能力の付加もあったほうが良いよね！

うん、そんな感じで。まずは話しかけてみてみよう！

やっべぇ！何この天使！ものすっごく可愛いんだけど！良いの送ってきてくれたぜ筋肉神！許してやるから早く助けやがれ！

「貴女は前世の記憶を持っていて、生まれ変わりをしていますよね？」

静かにそれでいて力強い声で問いかけられた。

う……なんか怒ってらっしゃる？どういうことだよ筋肉神！とにかく話をしないとマズイ！

「キュルールルルルー」
（そ、そうだ！助けてくれ！）

うげ！人間の言葉出ねぇじゃねぇか！間違えられてどこかいかれたら困る！

「キュルルルル！」
（頼む！見捨てないでくれ！）
「もしかすると、言葉を話せませんか？……それでは私が質問をします。首を振って答えてください。大丈夫ですか？」
「キュル！」
（おう！）

とにかく首を縦に振る。
良かった、転生者だって事は確認してもらえたみたいだ！あとは人間にしてもらうだけだ！

「貴女はマッチョな神の所で、泉に飛び込んだ方ですよね？」

こくこく。
（そうそう！）

「これから1度きりしか使えない神の力で貴女を助けます。まず完全な人間になれる様に。それから竜の姿と半竜人の姿にも。今は分からないと思うけれど、竜種はアドバンテージです。だから変身出来るようにします。問題は無いですか？」

こくこく！
（オッケー！完全な人間になれれば後はどうとでもなる！）
「貴女の転生特典はそのまま残ります。成長は遅くなるけれど、人の姿は元の姿とほぼ同じ年齢に出来ます。そこからは我慢してくださいね？」
こくこく！
（よっしゃ！最高だぜ天使様！）
「それでは始めます」
そう言うと天使は持っていた本に手を当てた。
ん？何だあの本は？神の書物とかそういうパターンか？
「『セフィロト・キー』召還。起動を準備して……！」
鍵形で１ｍ程の杖の先に、セフィロトの樹が描かれた直径２０ｃｍ程度の円盤が見えた。
うは！セフィロトかよ！さっすが天使！中二病オツ！
「適応完了だね……。いくよ？『リライト』！」
ちょっと待てぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！リライトってあれだろ！完全なる世界≪コズモエンテレケイア≫だろ？！
ここで昇天確定かよ！死亡フラグは折れませんでした！
――セフィロトの形の杖が光の粒子に変わり、俺の身体を包み込んだ。
「キュルァ……！――あぁぁ？え？！」

いま……喋れたか？

「大丈夫？言葉は話せる？」

「あ……あぁ……、声がだせる……」

ちゃんと……、人間になってる……。よっしゃぁあ！これでまずはラカンをフルボッコだ！それからハーレムだな！

「良かった！良かったよ！貴女みたいな小さい子をずっと一人にしてごめんね！」

そう言うと天使にいきなり抱きかかえ上げられる。

うお！天使様いきなりスキンシップですか！むしろ大歓迎です！

「あ、ごめんね、とりあえずサイズは合わないと思うんだけれど、この外套を被ってもらっていいかな？竜の姿で連れて帰ったら目立つし、女の子をそのままで居させる訳にいかないからね」

へ……？女の子？何を言ってるんだ？元の姿に戻してくれたんじゃないのかよ？

そう思うと自分の体を触ってみる――！

な……？！嘘だろ……？

「……。お……」

「お？」

「俺は男だぁぁぁぁ！」

「えええぇぇぇ？！泉の側で泣いていた女の子じゃないのかな？！」

……ぐ！この天使まさか天然か？！まさか勘違いでこの姿か？！

「ちがう！俺は男だ！泉に飛び込む時は、『魔力はナギの倍！気はラカンの倍！不老の超命種』って頼んだ！女にしてくれなんて言ってねぇ！」

この勘違い天使め！もう1度セフィロト出せよ！ってまて！1度きりとかさっき言っていなかったか？！

「あぁ、あの時真っ先に飛び込んだ男の人……。何も考えてなさそうだったんだよね～」

「何？！あんた見てたのか？！」

見てたなら尚更間違えるなよ！

「う、うん。私も転生者なんだ。とは言っても希望とかは無視されて、マッチョ神に無理やり天使にされたんだけれどね。あの女の子がずっと気になっててこの時代に来るって聞いていたから、てっきり貴女だと思ってて……」

「無視された……？しかも無理やり？って勘違いには変わらないのかよ！」

「ご、ごめんなさい！でも、これを見てくれないかな？」

そう言われて、セフィロトの杖が出てきた本の表紙裏を見せてくる。

【『セフィロト・キー』の適応完了】

・名前を設定が出来ます。

・転生時の枷『物事の曲解』を解除しました。
・受肉により「リライト」の影響を受けません。
※以下は上位神による初期設定により変更不可能です。
・種族　ウィンドドラゴン　女性
・転生特典
魔力強大、気強大、老化し難い、成長晩熟、長命種。
・風の加護
生まれつき持つ竜種の能力。風の精霊との親和性がかなり高い。

な、何だこれ！『曲解』って俺が願った能力そのままじゃないのかよ！

「ど、どういうことだよこれ……」

声が震えてるのが分かる、マジで泣きそうだ……。

「最初から説明するね。まずあのマッチョ神は私達を、輪廻の輪から無理やり攫って来たの。だから転生させてやるとか言っていたのは、言い難いけれどマッチョ神の遊びなんだ」

遊びだとぉぉ！ふざけるな筋肉！何だと思ってやがる！

「続けるよ？それであの泉の前に居た私達には、あまりものを考えられなくなる暗示の魔法がかけられていて、そもそも曲解したり単純な願いだけを言うようにされてたの」

マジか……。この天使、もとい転生者の先輩の言ってる事が本当なら、死亡フラグとかどうでもいいくらい霞むな……。

「それであんたは何なんだ？どうしてそんな力が使えて事情を知ってる？」

「私は暗示が効き難かったみたいで、マッチョ神に色々問い詰めようとしたの。そうしたら嬉しそうにお前を部下にしてやるって。そのまま『神核』って神様の魂みたいのを飲み込まされて、地球で身体を砕かれて、精霊にされたんだ」

ここまで来ると笑えねぇな……。身体を砕かれるってどんなだよ。

「そのまま１８００年程、精霊に溶け込んだまま意識はほぼ無くって、別の女神様が助けてくれたんだけれど、そのときにマッチョ神は罪を犯したから消滅させられたって聞いたの。私には『神核』があるから、天使になってこの世界の管理を引き継いでくれって。そして転生者に埋め込まれた不幸な枷を取り外してあげてほしいって、この本を託されたの」

は、ははは……ありえねぇ……。俺のほうがよっぽどましじゃねぇか。食べ物さえあればドラゴンの力で何とか生きていけたかもしれない。それがこいつは意識を飛ばされて、使役されて、何百年も俺を待ってたって？

「とりあえずここに居てもしょうがないと思うんだ。メガロメセンブリアに家があるから、一緒に来ない？」

「あ、あぁ……。」

屈託の無い笑顔で微笑む彼女に、俺はそう言うしかなかった……。

第１３話　出会い（後書き）

１３話終了。

第１４話　新しい名前（前書き）

ここまでで連投終了です。
この後、設定２を投稿。

第１４話　新しい名前

「ではその子が、おっしゃっていた救済すべき魂の１人ですの？」

うわー……、いかにもお局様なシスターだな。こんなのを相手にしてるなんてシルヴィアのやつも大変だぜ。

「えぇ、彼女の魂の枷はすでに解き放ちました。今は無垢な仔羊。これから生きる術を学び、羽ばたいて行く命です」

すげぇな……。堅苦しい言葉がすらすら出てきてやがる。ここに来るまで普通の女の子みたいに喋ってたが、伊達に何百年も天使様やってねぇって事かよ。

「それから彼女には名前がありません。出来ればきちんとした名前と後見人を付けてあげたいのです」

「あら、それでしたら【銀の御使い】様が後見人になるのがよろしいのではなくて？教会に身を置くのでしたらこれ以上の後見人はありませんわ」

「私は使命ある身です、いつまでもメガロメセンブリアにいられないのです」

【銀の御使い】だと？二つ名持ちかよ！それにしても使命ってのは世界中で転生者を探し回ってるのか？

「では洗礼は受けさせますの？」

「それは本人の意思で決めてもらいたいと思っています」

洗礼？！俺は宗教信じて無いぞ！いや神様が実在してるのはもう十分解っちゃいるんだがな……？とりあえず名前どうするか。不本意だが男には戻れないみたいだし、神の力ってのもあの筋肉が上級神だったせいでどうにも出来なかったみたいだし……。だからって女の子らしい名前はごめんだ！

「では『フローラ』はいかがかしら？これから花咲く可憐な少女にふさわしいと思うわ」

何いいいぃぃ！ちょっと待て！そんないかにも女の子な名前はごめんだぞ！

「えっと『フローラ』……？って呼んでいいのかな？」

「イヤだ！おｒ……むぐむぐ……！」

『俺は男だ！』って言おうとしたら、シルヴィアが口をふさいできた。

（彼女を怒らせると、見習いの子達はすっごく怒られるの！だから、言葉使いは気をつけて！”ふり”で良いから、丁寧な言葉でね！）

そう耳元でささやいてくる。

なるほど……やっぱりお局様なわけか！しかしフローラはねーよ！だからと言って決めないとフローラにされちまいそうだし……！

「その子に異論が無ければ『フローラ』と呼びますわ。よろしくて？」

やべぇぇぇぇ！何か考えないと！せめて中性的な名前で！

「ふ、ふろーー！」
「フロウ？そっちが良いのかな？」
ナイスだシルヴィア！『フローラ』に比べたら１００万倍ましだ！
「あら、では『フロウ』ね。これからよろしくお願いいたしますわ」
「は、ハイ。ヨロシクオネガイシマス」
あ、あぶね～……。もうちょっとかっこいい名前が良かったが、仕方が無い……。
「それでは【銀の御使い】様、この子を着替えさせてきます。後でお部屋にお連れいたしますわ。着させていた外套は洗濯させておきますわ」
「はい、よろしくおねがいします」
あぁそうか、マント借りたままだったな。うん？なんでシルヴィアはそんな顔でこっち見てるんだ？何か哀れむような……？
「それではフロウ。こちらにおいでなさい」
「あ、はい」
「また後でね」
「シスターではないので修道服は着せませんが、【銀の御使い】様が連れてきた娘です。それなりの格好をしなければなりません。で

すのでこれを着なさい」
「はぁ……？！」

そういって渡されたのは、上品にレースがあしらわれた白いワンピース。修道院という場所柄か肩の露出を控えた長袖のものだが、女物という時点でありえない。
ちょ！あのときの哀れみの目はそういう事か！まて！もしかして下着も！

「着方は分かるかしら？」
「え、その、あの……！」

まてまてまて！
パニックを起こしている間にお局シスターにテキパキと着せられていた。
いつの間にか髪を梳かされている。

「は……！俺は何を？！」
「俺？」

じろりとお局シスターの目線が光る。
あ、しまった。シルヴィアが言葉使いには気をつけろって言っていたじゃないか！でもいきなり女言葉は無理だって！

「フロウ。貴女はまだ小さい。【銀の御使い】様が魂の枷をお解きに成られたと言うならば今まで苦労してきたのでしょう。これからは皆で淑女の何たるかを大切に教えていきます。よろしいですね？」
「ハイ……」

お局シスターの眼光の鋭さに、そう答えるしかなかった……。

「シルヴィア……きたぜ……」
「いらっしゃい。……やっぱり可愛くされちゃったね」

あぁやっぱり解ってたのか……。そうならそうと言ってくれればよかったんだ。

「私のほうで動きやすい服とか、中性的なものを用意しておくよ、でもシスターに見つかったら怒られると思うから、結局はある程度は慣れないとダメかな？」

そうか、怒られるのか……。じゃぁなるべくシルヴィアと居よう。俺の事をちゃんと知ってるのはシルヴィアだけだしな。あとは他の転生者か。俺達のことを考えたらやっぱり酷い事になってるのか？

「なあシルヴィア。他の転生者ってどうなってるんだ？」
「分からないの。生まれる年代が近くならないと情報が出てこないんだよ」

情報？この間使っていた本か。見せてもらえるなら何か調べられるんじゃ？

「シルヴィア。この間の本を見せてくれないか？」
「え？！……良いけど……私にしか使えないし、それに……笑わないでね？」

笑う？何で渋ってるんだ？

「はい……」

どこからとも無くいきなり本が出てきた。とりあえず受け取ってみてページをめくる。

……。『シルヴィアちゃんの取扱説明書♪』って――！

「はぁ？！」

「だから笑わないでって言ったのに……」

これも神の悪戯ってやつか……！

ぺらぺらと内容をめくってみると……。

「チートじゃねぇか！」

「やっぱりそう思う？」

俺の『魔力はナギの2倍、気はラカンの2倍』も大概だと思ったが、こいつのはおかしいな。筋肉神が魂の器に限界があるとか言っていたが、神の魂は伊達じゃないって事か。

「とりあえず役に立ちそうなのは魔法の教本部分くらいっぽいな。あとは転生者に直接会わないとダメだろう」

「うん。でも魔法はそれに書いてある事以上の知識はもうあるから、別にまとめてあげるよ」

「お！それは助かるぜ！」

気は何となく解るが魔法はさっぱりだからな、先生も居る事だしじっくりと魔法を覚えるか！

第１４話　新しい名前（後書き）

１４話終了。

風竜という事で、フロウ≪ｆｌｏｗ≫にしました。

「名は体を表す」を意識しています。

第１４．５話　設定２（ネタバレ注意）

主人公２の初期設定

名前：フロウ

誕生：１３００年頃生まれ（生前は２２歳）

性別：女性（生前は男性）

身長：現在の人間体は１２５ｃｍ、竜体は２ｍ程。（生前は１７８ｃｍ）

体重：人間形態２８ｋｇ、竜形態は測定不能。（生前は７４ｋｇ）

種族：ウィンドドラゴン

枷：『物事を曲解』

【外見】

シルヴィアの勘違いと、『曲解』によってアジア系寄り少女の外見に。

深緑色のショートヘアに緑の目。皮膚の色もアジア系。

竜形態では深緑色の鱗を持つ翼竜。竜と人を会わせ持つ形態にもなれるが子供の姿に引っ張られる。

【特徴】

自己中心的で猪突猛進な気質。元男性だが、シルヴィアの境遇やメガロメセンブリアのシスター達に淑女教育を受けさせられ、良い意味でどんどん面白い方向に曲がって行く予定。

原作の一部の大きな出来事や重要人物の知識がある。そのため『正義の魔法使い』気質には染まっていく事が無い。

『セフィロト・キー』で再構成されたため、魔法世界人でありながら『造物主』のリライトには縁がなくなった。地球でも生きていける。本人は魔法世界の秘密を覚えてない。

【能力】

・風の加護

生まれつき持つ竜種の能力。風の精霊との親和性がかなり高い。

・転生特典

魔力はナギの2倍、気はラカンの2倍で、成長し難い超命種。

ただし能力の制御が出来ていない。そのため初期のシルヴィアやくしゃみネギ状態。

メガロメセンブリアで教育を受けて改善していく予定。

第１４．５話　設定２（ネタバレ注意）（後書き）

設定２終了です。

第１５話　確認と今後の行動（前書き）

２話連投です。

追記１／７（土）０：３３
アクセス解析を見たらいつの間にか
ユニークアクセスが１３００人越え！
ＰＶ１２４００アクセス超え！驚きです！
趣味と勢いだけで始めましたが嬉しいものですね。
まだまだ初心者ですがよろしくお願いします！

第１５話　確認と今後の行動

「プラクテ　ビギ・ナル　火よ灯れ！」

……何も起こらない。

……分かってたよ！いきなり魔法を使えないことくらい！

シルヴィアから借りた初心者用の杖を持って魔法の練習を始めてみたのは良いが、やっぱり簡単にはいかないか……。シルヴィアが言うには、魔力だけあっても制御や理論をしっかりしていないと暴走したり、思ったとおりの結果が出ないらしい。

そういえば原作のネギ坊主はしょっちゅう魔法を暴走させていたな。

今の俺はあれと同じレベルか。いや理論はさっぱりだからアレ以下かよ……。

「まずはイメージかな。どこに、どんな形で、どんな効果が、どれだけ起きるのか。そのイメージが出来ていないと、精霊だって何をして良いのか分からないよ」

なるほど……経験者のいう事は違うな。しかしイメージか。見せてもらったほうが早い気がするな。

「シルヴィア、ちょっと見本見せてくれよ」

「うん、いいよ」

そういうと肘を上げて、指先を空に向けて一言。

「光の灯火」

そう呟くとシルヴィアの指先に光が集まる。

なんていうか密度？小さな光だが凄く濃厚な気配がする。これが魔力か？

「何か呪文ちがくねぇ？」

「火より光のほうが相性良くてね。光れば同じじゃないかな？」

まぁそうなんだろうが、何か納得がいかない……。

「私の場合は、初級は独学だったから１０年くらいかかったんだけれど、ここは教えてくれる人が多いから、結構すぐ色々つかめると思うよ。あと、始動キーも考えておかないとね」

１０年か。まったく教えてくれる人が居なかったとしても、シルヴィアには教本があった。それで１０年って事は俺の場合何年かかるんだ？

「ちなみに私の場合は、精霊との親和性が高すぎる上に魔力も高いせいで、制御が全然出来なかったのが理由だよ。フロウくんの場合は相性が良い風を中心にイメージと制御の練習かな」

なるほど……！じゃぁとりあえずイメージからか！魔法をたくさん見せてもらおう！

そういえば、シルヴィアは原作の事は全然知らないのか？

「シルヴィア、話が変わるが原作ってどこまで覚えてる？」

「全然覚えて無いよ」

「はぁ……？！」

ちょっと待て。全然覚えてなくて２００年以上やってきたのかよ！よくそれでメガロメセンブリアに家買ったな！

「俺が覚えてる原作教えておいてやるよ。準備しておいたほうが良いぜ。と言ってもまだかなり先になるから、忘れない様にメモしておいたほうが良いな」

「ホント？！それは助かるな～。女神様から２００３年の夏に魔法世界≪ムンドゥス・マギクス≫で山場だって事だけは聞いてるんだよね～」

大丈夫かよそれ……。

とりあえず、大きな事件のまとめだな。

――覚えてる知識をまとめるとだ。

・原作の約６００年前
エヴァンジェリンが真祖の吸血鬼に転化。

・原作の約２０年前、戦争が起きる。
ナギ・スプリングフィールドとかジャック・ラカンとかが活躍する。

・２００３年の３学期に麻帆良学園で原作開始。
ナギの息子の、ネギ・スプリングフィールドが何故か女子中の先生になる。

・エヴァに襲われたり、修学旅行や学園祭でトラブル多発。
仮契約者が増えていく。
・２００３年の夏に魔法世界≪ムンドゥス・マギクス≫に行く。

あれ？意外と覚えてねぇ……。とにかく今は１３００年代。約１００年後のエヴァンジェリンに接触するかどうかが１つ目の問題か。

「エヴァンジェリンはどうする？関わりに行くのか？」
「うーん、転生者がいれば関わるよ。絶対に。ただ居なかったら放置かな～。悪いとは思うんだけれど、原作の大きな出来事は必ず起きるって言われてるから、誕生は必ず起きるんじゃないかな」

なるほどな。確実に起きる出来事だから邪魔は不可能。後々良い立場にする事は協力できるかもしれないが、修正力とか働きそうだ。

「本の確認は定期的にしているから、１４００年前後に生まれれば探す事はできるよ。ただしそばに近寄らないといけないから、世界中探すとなると結構大変かな。フロウくんの事だって時代が分かっていたから、運が良かったと思うよ？」

確かに運がよかったかもしれない。山肌の小さな洞穴に居たわけだから、空を飛べるシルヴィアには見つけやすかったと言うべきだな。エヴァンジェリンは何処かの城に居たはずだが、転生者が近くに生まれるとは限らない。それならば……。

「やっぱり修行だな。分からないものに警戒しておく必要はあるが、準備を整える事に専念だ！」

「うん、分かった。魔法は教えるけど、気は出来ないから独学になっちゃうと思うよ」
「気は何となく使えるから問題ねぇな。それじゃ早速修行だ！」
――まってろよ筋肉ラカン！フルボッコだからな！

――数ヵ月後。

「なぁシルヴィア！グラニクス行かねぇ？」
「自由交易都市？どうしたの急に？」
「拳闘士やってみたい！」
「え……？結構危ない所だったと思うんだけれど？」

やっぱり怪訝そうな顔してるな……、まだ俺だって力不足は分かっちゃいるんだが、実際この世界の実力者って言うのを知っておかない事には活動は出来ないだろう。
シルヴィアなら後衛の魔法使いにはピッタリだ！魔法はまだうまく使えないけれど気は気合で何とか使える。実力も分かって修行も出来るから一石二鳥だと思うんだよな。
「うーん、シスター達が認めないと思うけど、様子を見に行って、どんな実力者が居るか確認するくらいなら大丈夫じゃないかな～？」

「よし！じゃぁ行こうぜ！」

約束は取り付けた！こっそり参加申し込みして実力アップだ！

第１５話　確認と今後の行動（後書き）

１５話目終了。

第16話　グラニクスの拳闘士

――どうしてこうなったのかな？

「さぁ本日の飛び入り参加！見た目は小さな少女ながら竜人のフロウ選手！相方は謎の白マントの精霊亜人ホワイティ選手！名前がそのまんまだー！」

見学するって言ってたよね？拳闘士の実力が分からないから見てみたいって言っていたけれど、何も目の前じゃなくて良いんじゃないかな？と言うか何で私は偽名？！

「いいじゃん。二つ名持ちなんだろ？相手に警戒されて実力見れないよりマシじゃねぇ？」

「あれは教会関係の一部の人が言ってるだけだよ？魔法世界≪ムンドゥス・マギクス≫じゃ、全然有名じゃないよ！」

「よし！じゃぁ、今日から有名人！」

「ちょっとぉ！」

まったく急すぎるよ！見学じゃ満足出来なくなっちゃったかな？帰ってからシスター長に怒ってもらおう！私みたいに偽お嬢様教育で苦労すれば、巻き込まれる大変さが身に染みるよね？

うん、次の魔法修行はハードモードは確定かな～。

「対するは獣人のラグ選手！相方は魔法使いのオード選手！どちらもオーソドックスの前衛後衛マッチになりました！これはどうなるー！」

よし！一瞬シルヴィアの顔が黒くなってるように見えたが問題ないだろう！ぶつぶつ言ってるがちゃんと戦ってくれそうだ！
問題はあっちの獣人だな。体格差は気で補えるか？子供の体といっても俺の身体は竜種だから、気を纏えばそれなりにパワーはあるはずだ……！とにかく思いっきり殴ってみるか！

「それでは試合開始！」

オオォォォォォ！

うっわ！会場の熱気やっべぇ！とにかく殴りこむ！気を集中！気合だ気合！
叫ぶような要領で全身に気を纏う。
漏れてる量も結構あるが纏えるだけ上等だろ！

「てりゃぁぁぁぁ！」

右手に気を集中して突撃！風竜のせいか、風を纏っている様な気もするな！

バシィン！

「ほぉ～。見かけによらず中々良い重さのパンチじゃねぇか！」

フロウの右手に纏った気も風もラグは片手でいなす。
あっさりかよ！結構気合入れたんだが！って、拳を捕まれちまった！

「――氷の精霊２７柱！集い来たりて敵を射て！魔法の射手！氷の２７矢！」

やべぇ！魔法使いが撃ってきやがった！
後ろの魔法使いが相手の獣人を避ける様に、左右と上から撃って来る。

「げ！避け場がねぇ！」
「はっはっは！お嬢ちゃんはこれで終わりだ！」

マジか！こんなにあっさり！

「魔法の射手！連弾・光の１０１矢！」
「なんだと？！」

後ろからシルヴィアの声が聞こえた。
相手の魔法使いの氷の矢を全部相殺。そのまま獣人だけを吹き飛ばす。

「く……！シルヴィア助かった！」
「ホワイティですよ？」

あ、やべぇ、目が笑ってない。

「まったく。練習相手にしたかったみたいだけれど、相手にもなってないよ？」

悔しいがまったくその通りだ。修行は結構したつもりなんだがこの様か。
もっと気の使い方を、ちゃんと習うべきだな……。
「どうやら魔法使いの方を先に叩くべきだな！オード！」
「任せろ！」
げ、向かってきやがった！
気合で防御できるか？
「光の楯」
「――何？！」
すげえ……。　相手の攻撃がまったく通ってない。
これが魔法使いの戦いってやつか。正直なめてた……。
魔力と気さえあればテキトウに魔法使ってボコボコに出来ると思っていたんだが……！
「――来れ氷精　大気に満ちよ　白夜の国の　凍土と氷河を　こおる大地！」
「よっと！これでおしまいだぜ！」
マズイ！気を纏った攻撃をされた後にさらに魔法だ！これじゃいくらなんでも！
パシン！
氷結魔法が闘技場を凍らせながらシルヴィアに向かって行くが魔法障壁に阻まれる。

マジか……。防御魔法解けてねぇじゃん……、ドンだけ頑丈なんだよ。

「闇夜切り裂く　一条の光　我が手に宿りて　敵を喰らえ　拡散・白き雷！」

シルヴィアが唱えた雷魔法が相手に降り注ぎ、痺れと煙幕を張る！

「今！」

「お、おう！」

完璧に引き立ててもらった形か！だがせめて一発！

「おぉりゃぁぁ！」

――今度こそ殴りつける！

必死に気合をこめた右手を、獣人めがけて振り切る！

バキィ！

「ぐぁ！」

そう言って獣人は倒れこみ気絶したようだった。

「ノックアウトー！ラグ選手！オード選手ともに立ち上がりません！勝負あり！」

オオォォォォォ！

「か……勝てた……！」

「うん、勝てたね～」
闘技場を退場しながら、そう呟く。
――ハッ！ヤバイ本気で目が笑ってない！
「ちょっと、露店に……」
「じゃぁ、私も付いていこうかな～？」
ぐ……。そうだな……素直に謝って、修行を付けてもらうか……。
「……ごめん。調子に乗ってた……。格が違うのが身にしみた」
「うん、それともう１つだね」
何？！２つ目だと？！何だ！何に怒ってる？
……考えろ俺！このままじゃまた死亡フラグか！
「嘘ついたでしょ？」
「――え？！」
嘘？――って、あ！勝手に登録した事か！
「そっか……、勝手にごめん。でも俺どうしても大会に出てみたくて……」
「出てみたいのは分かってたよ。男の子の顔してたからね。でも嘘ついて出場はダメ。きっと出たいって頼んでくるんじゃないかって思ってたよ」
ははは……。完全に見抜かれてるじゃねぇか……。
「フロウくんは前衛向きな性格は分かるけれど、それだけじゃダメ

なのはよく分かったでしょ？一人でできる範囲は限られてくる。だからもっと相手を頼って、その上で自分でも対処する手立てを持っておくのが一番かな？」
「あ、あぁ……」
「今度シスター達の練習以外に、魔法部隊の知り合いに来てもらおうか？近距離も遠距離もエキスパートの人が居るからね」

魔法部隊！メガロの騎士団とかってあまり良い印象無かったけれどそれでも今の俺より遥かに強いはず！

「あと、精神は大人かもしれないけれど、自分の体は2歳にもなってないって忘れてないかな？成長も遅いってのもあるんだし～？」

……あ！……完璧に忘れてた。

第１６話　グラニクスの拳闘士（後書き）

１６話目終了です。

次は数話まとめて連投予定です。

先のストックを確保中。

第１７話　探しものは何ですか（前書き）

少し間が空きました。
お正月の内に書き溜める予定が、風邪を拗らして7日の朝から寝込んでしまい、ストックが余り準備できていません。
キリの良い所までアップします。これからしばらくはストック溜めと矛盾チェックになります。
お気に入り１１０件越え！３０００ユニークアクセス、３００００ＰＶになっていました！
ありがとうございます！

第17話　探しものは何ですか

――１４００年初頭。

あれからフロウくんは魔法部隊や騎士団の人と模擬戦形式で特訓をしていました。メガロシステマっていう近接格闘術があるそうです。

騎士団の人達も、竜種との仮想戦闘は良い訓練になるって事で、人間形態だけじゃなく竜の姿でも特訓をしてたみたい。でも元人間だからか竜形態でも半竜でも違和感が酷いそうです。

私も翼に慣れるのにかなり時間がかかったから、生まれつきじゃないと難しいみたいだね。

「なぁなぁシルヴィア～」

「どうしたのフロウくん？」

私と話す時は男の子っぽい口調だけれど、近頃は慣れないといけないからって、外向きは丁寧に話して『私』って言ってるみたい。シスターの教育に苦労してるのかな？

「１４００年に入ってしばらく経ったけれど、本の反応は無いんだろう？それだったら、ちょっと日本へ行って来てくれないか？」

「日本？どうして急に？」

日本かぁ～。今ってどのくらいだっけ？侍が普通に居る時代のはずだよね？

「もう数十年か１００年単位で戦国時代になると思うんだ。それまでに現代でいう埼玉県にある『神木・蟠桃』って世界樹と土地を抑えておいた方がいいと思う」
「世界樹？！」

日本にそんなのあったかな？埼玉県にそんなのがあったら大騒ぎというか、パワースポットで大流行だよね？

「俺たちが知ってる日本には無いよ。ここが『ネギま！』の世界だって忘れてないか？」

――あ！そうだった、３００年も魔法使いやってるから忘れてたよ……。

「忘れてたって顔してるな……。とにかくそこには未来で『麻帆良学園都市』ってのが出来る」
「それはこの間まとめた、覚えてる範囲の場所かな？」
「あぁ、そうだよ」

ふむふむ。確かに魔法使いの学校が建設されるなら、確認しておく方が良いかな？

「でもまだ６００年も後だよ？早すぎるんじゃないかな？」
「確認だけでも良いんだよ。世界樹はかなりの魔力を持っているから、今どうなっているかを観て来るだけでも価値はあると思うんだ」

なるほどね～。世界樹って言うだけあるのなら、その魔力は地球を回っているだろうし、もしかしたら私の『神核』にも影響があるのかな？

「あと、ゲートはメルディアナだよな？それなら、前に言っていたヨーロッパの家を回収してくるのも良いだろう。今なら『ダイオラマ球』だって買えるんだし」

『ダイオラマ球』ね。あれならボトルシップみたいに、家や土地を丸ごと保存できるから、抱える程の大きさだけれど、本気で飛べば問題ないかな。

「うん、それじゃ確認に行ってみるよ。フロウくんは行かないの？」

「俺はいいよ。こっちでまだまだ修行したい事もあるし、せっかくメガロに居るんだ、後々の為に色々やっておいた方が良いだろう？」

……わーお。フロウくんが策士になってきてる。

「ちなみに世界樹の土地を確保しておくのは、人より長生きな俺達の生活費を、いずれ土地の借地代金で賄えれば金に困ることも無いだろうってね」

真っ黒だよ！いつの間にこんな黒い子に！昔はあんなに無邪気な少年（？）だったのに！

「まぁ、麻帆良学園にはメガロ関係者も行くはずだし、どっちにとっても都合が良いだろう。しばらく離れても問題ない様にしておくから、数年かかっても大丈夫だ」

……。本当に黒いよ。

そんなわけで、久しぶりにメルディアナにやってきました。１００年経てば魔法使いの人たちは、協力者って立場で覚えてくれていたみたいだけれど、一般人や表の教会関係者には、「昔、この土地に天使様が舞い降りたんだ」って、自慢げに話されてしまいました……。

目立ちたいわけじゃないから良いんだけれど、これってまた時代が経ったら美化されて崇められてしまったりするのかな？天使的には良い事なのかもしれないけれど、自分の事だと正直どうして良いか分かりません……。

「ダイオラマ球の梱包と運搬ありがとうございました」

「いいえ。これも仕事の内です。魔女狩り等を行う者もおりますので、注意して向かってください。」

やっぱりまだ中世だからね。むしろこれからが本番だったりするのかな？

飛行時に翼の邪魔になるので、肩掛けショルダーバックに外套を。薬草やちょっとしたものをウェストポーチに入れて、ダイオラマ球を抱き抱えると翼を広げて飛び立った。

――ヨーロッパ上空。

何だろう？何だか変な魔力を感じる。闇系の魔力かな。精霊も騒

いでるし。もうしばらく飛び続けたら黒の森の家なんだけれど……。
思考の渦に捕らわれていると、出そうとしていないのに私の本がいきなり現れた。

「きゃっ！こんな飛んでる時に何でいきなり？！」

いきなり本が出てきて驚いたけど、もしかして転生者？！
本は浮いてるみたいだから大丈夫そうだけれど、急に出てくるなんて初めてだよ。

「とりあえず、近くの隠れられる場所に……！」

上空から林を見つけて降り立つ。そのまま荷物を降ろし、本を見てみると――！

・名前　アンジェリカ・マクダウェル

・種族　真祖の吸血鬼　女性

・転生特典
一緒に居る事も出来る姉。

・枷　『真祖に転化後は理性封印』

――え？！真祖の吸血鬼って、エヴァンジェリンって人じゃなかったの？！
それよりもこの『枷』は酷い！理性の無い吸血鬼になる前に止めに行かないと！

確か、フロウくんは城に住んでいたはずって、言っていたよね。
よし……！
「影と闇の精霊たち……集まって。お願い！私に彼女達の居場所を教えて！」
――そう言うと、視界いっぱいに闇が降りてきた。

第17話　探しものは何ですか（後書き）

17話目終了。

第１８話　闇の福音（前書き）

しばらく話が暗くなります。
キャラクター上避けられないと思い、この様になりました。

第１８話　闇の福音

――遡る事１０年前。

まだか！まだ生まれないのか……。

妻が産気づいてから早数時間。初産とはいえここまで時間がかかると余計に心配が重なる。

「旦那様。もうすぐですわ。お掛けになってお待ちくださいませ」

「む……うむ。」

気が付かない内にうろたえが行動に出ていたようだ。この年になって情け無い。

しかし、本当にまだなのか。

「おぎゃぁぁぁぁ！」

「ほぎゃぁぁぁ！？」

聞こえた！赤子の声だ！それも2度も！

「旦那様。無事にお生まれになられました。双子のお嬢様です。奥様もご無事ですわ」

それを聞くと思わず顔がほころびる。

「そうか！でかしたぞ！」

男児ではなかった事が少々悔やまれるが、２人も子を授かるなら僥倖だろう。

「あなた……」

「良くやった！この子達か……」

「金の髪を持つ姫様が姉君。やや茶金の姫様が妹君になります」

ふむ…。考えていた名前の候補が捨てる事にならずに済んだか。

「では姉をエヴァンジェリン。妹をアンジェリカと名付ける。２人の未来に幸運があることを願おうじゃないか！」

――マクダウェル卿は知らなかった。生まれる前から決めれらた絶望を。

――家族に会いたい。

『神様は何がほしい』って聞いてきました。だから私は家族がほしい。暖かかったママ。優しかったパパ。一人っ子だったから友達のお姉ちゃんに憧れていました。

「お前はもう死んでいるんだ。だから新しい家族を授けてやろう！」

「新しいママとパパ？私のママとパパには会えないの？」

新しい家族？あの優しさは無くなっちゃうの？

「心配する事は無い。姉もいるぞ」
――お姉ちゃんが出来る！
私はその一言が何よりも嬉しかった。
「ハイ！」
元気良く返事をして泉に飛び込んだ。
――気持ち悪い笑いを浮かべる神様に気づく事も無く。

ここはどこだろう？
暖かい。体が全然動かないし、とっても眠いよ。
すぐ目の前には知らない男の人と嬉しそうに微笑む女の人が居ます。
「エヴァンジェリン、貴女はお姉様よ。その美しいブロンドの様に妹を守り、マクダウェル家の姫になるの」
エヴァンジェリン！
そうだ。『ネギま！』ってマンガに出てきた魔法使いの女の子だ！
それじゃぁ、魔法使いの女の子に会えるんだ！
「アンジェリカ、貴女のブラウニッシュブロンドもとっても綺麗よ。将来きっと美人になるわ」

アンジェリカ？どこの外国の女の子？

「貴女は妹。お姉様を助ける優しい姫に育ってちょうだい」

――私がアンジェリカ？！

この女の人が新しいママ？もしかしたらあの男の人がパパ？

私、外国人になっちゃった？！あれ、でも言葉が分かる。神様が教えてくれたのかな？――ダメ。眠くて考えられない。少しおやすみなさい。お姉ちゃん。ママ。パパ……。

私はエヴァンジェリン。

将来はマクダウェル家の家督を継いで女領主になる。……と思う。きっとアンジェはお嫁さんになっちゃう。寂しいけれど貴族の生まれ。そう習った。

「おねーちゃーん！あのね――」

アンジェは良く笑う子。この子が悲しむ顔は見たくないと思う。だから私は守る。姉として。いずれ嫁いで行くかもしれない妹に、精一杯の愛情をこめて。

「どうしたのアンジェ？」

そう言って精一杯の笑顔を送る。帝王学。貴族の子女として習い

たくない事も習っている。アンジェにはそんな後ろ暗い貴族の面は知って欲しくない。けれどもいつかは社交界に出る事になる。それまでは私が――！

――１０歳の誕生日。

明日は私達の誕生日。そろそろアンジェも社交界デビューをする事になると思う。

私は少し前にデビューを果たした。品定めをする様な貴族達の視線。どこが本音か分からない腹黒い台詞。こんな所にアンジェを置きたくなかった。でも、アンジェも少しづつ貴族の教育を受け始めてる。何が危ないのか私が教えないといけない。アンジェ。貴女は私がが守ってみせるから――！

そうして私は、ベッドで眠りに付いた。

ふと目が覚める。

――美味しそうな匂いが口の中いっぱいに広がっていた。

「んむ？」

口をもごもごと動かして品定め。何の味か分からない。ただとっても美味しかった。

「ぐあああぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

「キャァーーーーー！」

「逃げ……あぁぁ――」

唐突に聞こえた。たくさんの悲鳴。

「え、何？！どうしたの？！」

思わず声をあげる。

おかしい。今日は誕生日パーティーのはずであんな悲鳴が上がるはずは無い。何か失敗して咎められたとしても、ここまで泣き叫ぶほどお父様は厳しい物言いをしない。

「アンジェは？！」

何かが起きているならアンジェにも何か起きるのではないか？

真っ先に妹の安否が頭をよぎった。

「……アンジェ！」

ベッドから飛び起きて、格好も気にせず走り出す。

――その時の私は、息切れもせず、人よりも速く走る自分の体に気づいていなかった。

「アンジェ！」

大広間に着いた時、アンジェが居た。
――人の形をした”真っ赤なナニカ”もあった。
「すばらしい……。子供ながらここまでの力を持つか！」
知らない声だ。その声に構う事無くアンジェを見る。
「キャハハハハハ！」
あれは誰？アンジェの姿をしたナニカは、大広間に居るナニカを掴み、切り裂き、潰し、投げ捨て、口に運び――違う！アンジェはあんな事をしない！
「なんだ、姉の方は失敗か？せっかく儀式が成功しても、化け物にならないんじゃ甲斐が無い」
儀式？化け物？この男は何を言っているの？
答えを切望して男を睨み。見上げる。
「真祖の吸血鬼。おめでとう、君たち姉妹は化け物になった。遠慮する事は無い。暴れて良いんだぞ？」
今なんていった？化け物にした？吸血鬼？そんな御伽噺のような存在が――！
そこまで思って、アンジェに視線を送る。あれはアンジェじゃない。
本当に……バケモ――？！
パン！

――両手で頬を叩く！
私は何を言いかけた？！アンジェが化け物？あれはアンジェだ！
あんな事を喜んでする子じゃない！私が正気に戻して見せる！
「さて、私はそろそろ行くよ。狙われてはたまらない。楽しませてもらった。お誕生日おめでとう？化け物姉妹」

――ふざけるな！
化け物にしたのはお前だ！お前だけは絶対に許さない！
アンジェが許しても私が絶対に許さない！
そう思った瞬間！吸血鬼の破壊の力が私を突き動かしていた。
「ぐぽぁ？！」

男の口から赤い糸が流れ出る。
気が付けば私の右手が、男の胴体を貫いていた。
男の胸から手を引き抜き、無意識に舐める自分に嫌悪する……。
「ぐ……ふふ……なん……だ、ちゃんと……化け物じゃ……ないか」
「ダマレ」

怒り。それ以外にこの男へ向ける感情は無い。
「……ハハ、良い出来だ……」
男はそう言うと事切れた。
「アンジェは……？！」
急ぎ振り返って、アンジェを見る。

「風の精霊２１柱！　縛鎖となり　敵を捕らえて！　魔法の射手・戒めの風矢！」

――風が走る。

風圧に押されながら目を見開くと、風の中でもがくアンジェと天使が居た。

第１８話　闇の福音（後書き）

１８話目終了。

第１９話　私に出来る精一杯の願い

――精霊が教えてくれる。

――南西に２５００ｍ。マクダウェル卿って領主が居るお城。

――闇が泣いてる。

――闇が怒ってる。

「いっ……！」

思わず頭を押さえてしまった。

凄く荒れた精霊の声。普段は聞こえないのに、今日ははっきり叫びが聞こえた。

「こんな事は初めて。吸血鬼の力？とにかく全開！急いで行かないと！」

置いた荷物に結界と認識阻害をかけて、ウェストポーチからナイフを取り出し封印する。

「良し！」

思いっきり翼を広げて羽ばたき飛び立つ。

イメージは後回し！とにかく急ぐ！

「間に合って！」

……胸騒ぎがするよ。エヴァンジェリンって人も気なるけれど、アンジェリカちゃんもきっと苦しがってる。理性を取り戻す！絶対に！

……お城が見えてきた。

「凄い数の闇の精霊……」

まるで私が生まれた時の様な、凄い数。

これは絶対悪い事が起きてるよね！予感じゃない。確実に感じるよ！

「ぐぽぁ？！」

小さな女の子が男性の胸を貫いていた。

顔は見えないけど、……泣いているように見える。

「ぐ……ふふ……なん……だ、ちゃんと……化け物じゃ……ないか」

「ダマレ」

あの子、凄く怒ってる。声に篭る怒りが伝わってくる。アンジェリカちゃんは……？！

――え？！

視線を送ると、赤い水溜りの中に狂気じみた笑い声が聞こえた。
「風の精霊２１柱！　縛鎖となり　敵を捕らえて！　魔法の射手・戒めの風矢！」
――引き止める！
これ以上、泣かせちゃダメ！
傷付けないように魔力を抑え、拘束用の風の矢を放つ。
「アンジェ！アンジェェェェ！お願い！殺さないで！」
必死の形相で、小さな女の子が掴みかかってきた。
……って、力強いよ！普通の服ならもう破れてるんじゃないかな！
焦りを沈めて、優しく諭すような声で問いかける。
「大丈夫だよ。暴れないように助けたの。貴女はだぁれ？」
「エヴァンジェリン……。あの子の姉です！」
この子がエヴァンジェリン？！吸血鬼って言ったら怪しいマントの怪紳士とか、もっと大人の美女で妖艶なイメージがあったけれど？
「貴女が？吸血鬼の？」
ビクッ！っと震えるのが分かった。
しまった、言わない方が良かったかな。でももう言っちゃったし……！
「天使様は。私達が吸血鬼だから。裁きに来たのではないのですか？」
「違うよ。あの子の理性を取り戻しに来たの」

そう言うと、エヴァンジェリンちゃんの目が大きく見開かれる。
「お願いします！私に出来る事なら何でもします！アンジェを助ける力をください！」
「大丈夫、すぐに戻してあげるから。それに対価は要らないよ？」
そう言うと何か難しい顔をしてからハッキリした声で言った。
「アンジェを人間に戻せるんですか？私なら何でもします！」
元に……。それは、マッチョ神が先に設定した事だから……。
悔しいな……。
「ごめんなさい。人間に戻す事は出来ないの。私に出来る事は、今ある状態から最善を尽くすだけなんだ」
見るからに落ち込んだ表情になるのが分かった。
それでも再び顔を上げて告げてくる。
「アンジェのこと……お願いします！」
「もちろん！」
私には優しく微笑んで、応える事しかできなかった。
「始めるね？『セフィロト・キー』適応を開始……完了。『リライト』！」
そう言うと、セフィロトが描かれた鍵状の杖が光に変わって、アンジェリカちゃんに吸い込まれていった。

「アンジェ？！」

弾丸のように走り出したエヴァンジェリンちゃんが、倒れこむアンジェリカちゃんを支えて抱きしめる。眠る様に倒れた彼女を慈しむような目で見ている。

『セフィロト・キー』を使った後の状態を確認すると――。

【『セフィロト・キー』の適応完了】

・転生時の枷『真祖に転化後は理性封印』を解除しました。

※以下は上位神による初期設定により変更不可能です。

・名前　アンジェリカ・マクダウェル

・種族　真祖の吸血鬼　女性

・転生特典
一緒に居る事も出来る姉。

・真祖の魔力
吸血鬼の能力。
太陽光、流水、十字架などといった弱点が無効化される。

良かった……。人間に戻してあげる事は出来ないけれど、心が戻るならこれから受け止めることも、悲しみを受け入れることも出来

るかもしれない。

「ありがとうございました」

アンジェリカちゃんを抱えながら、エヴァンジェリンちゃんがそうお礼を言ってきた。

「ううん。私に出来たのはほんのちょっとの事だけ。頑張ったのはエヴァンジェリンちゃんだよ」

「……はい」

この子は強いな……。

眼に宿っている意思がいつか見た歴戦の勇者の様だった。

「ねぇ？これから貴女達はどうするの？私としては、ちょっとお話したいなって思ってるんだけれども？」

「私達とですか？……はい、分かりました。でも、この状態を何とかしないと……」

そうは言われてもこの状況……。赤い血溜まりと、形を残さない人。唯一原型があるのは、彼女が貫いた男の人だけだね。

「それじゃぁ、あなた達の着替えを持って移動しない？お城はこのままだと大騒ぎになるから、あまり良い気持ちでは無いと思うけれど、火を放って火事という事にして、弔いたいと思うんだけれど」

「火事……ですか。」

「うん、こんな身体のまま、残されて逝くよりは、形を残さない方が嬉しいんじゃないかな？」

「分かりました……」

何処か納得がいかない様子にも見えたけれど、荷物をまとめに向かう。
エヴァンジェリンちゃんの体格では、アンジェリカちゃんを抱き抱えると動き難いので私が預かると言うと、しぶしぶ預けてもらえた。

「それじゃ、火を放つね？」

荷物をまとめた後、城の外でそう言うと、エヴァンジェリンちゃんが呟いた。

「お父様、お母様。皆さん、どうか安らかに……。あの男も一緒に弔われるのは気に入りませんけれど……」

あぁ、なるほど……。そこが気に入らなかったんだね。

「火精召喚　槍の火蜥蜴　２５５柱！」

意思を持つ炎、サラマンダーを召還する。
城に放つと、城門や窓から内部に入り込み、業火に包まれた。

第１９話　私に出来る精一杯の願い（後書き）

１９話目終了。

第２０話　もう１つの闇

ふと目が覚める。

———あれ？何か良い匂いがする。

口をもごもごと動かすと、何かとても美味しい味がした。

「ふわぁぁ」

口を大きく明けてあくびが出た。

っと、いけない。また先生に怒られちゃう。貴族の嗜みって難しいな。

今日は私とお姉ちゃんの誕生日。お母様とお父様がパーティーを開いてくれる。

「よっと♪」

ベッドから降りて、何だか良い匂いがする方へ向かう。

疾風の様に走り出した私は、あっという間に着いた大広間を駆け抜ける。

「キャハ♪」

目の前が真っ赤になっていた。

良く分からない赤いナニカが声を出していた。

逃げちゃダメ！

「えい！」

手を振るうと、赤いナニカが沢山生まれた。
動かなくなるのを確認したら、砕いて口に含む。

「〜〜〜♪」

あれ？何だっけ？何か忘れてる気がする。
あ、お姉ちゃんだ。お姉ちゃんも一緒にやる？

「キャハハハハハ！」

お姉ちゃんがとても悲しそうに怒った顔をしていた。
私が先にご飯を食べちゃったからかな？みんな揃って『いただきます』ってしなかったから、また先生に怒られちゃう？大丈夫。もう先生は……■■ちゃったから。

「風の精霊２１柱！　縛鎖となり　敵を捕らえて！　魔法の射手・戒めの風矢！」

そう思って居ると、すごい風が吹いてきて私の身体を縛り付けてきた。
凄い風の音がして、回りの声が聞こえなくなった。

「むぅ〜〜〜。」

動こうとしてもまったく動けない。そうしている内にお姉ちゃんが泣きそうな顔でこっちを見ているのに気づいた。
お姉ちゃん？何で泣いてるの？

「――『リライト』！」

風の音が聞こえなくなった。そう思っていたら、眩しい光が私を包んだ。
とっても眠くなって、倒れそうになる私をお姉ちゃんが抱きしめてくれて、とても優しい顔で微笑んでくれた。最近はどこか怒った顔をばかり見ていたから、とっても嬉しかった。

――眼が覚める！

周りは木が沢山生えていた。
おかしいな？私はお城に居たはずで、パーティーのご飯を……え？

――私は何を食べた？

赤いナニカ。

――私は何をした？

赤いナニカを作った。

――赤いナニカは……ヒトだった……。

「イヤァァァァァァ！」
「アンジェ！大丈夫だから！落ち着いて！私が居るから！アンジェ！アンジェ！」

私は……。私は沢山の人を……。
涙が止まらなかった。それでも抱きしめてくれるお姉ちゃんが嬉しかった。

「あ！ダ……ダメ！」

――お姉ちゃんも壊しちゃう！
そう思って、お姉ちゃんを放そうとしたけれど、力が強くて離せなかった。
どうして？私、化け物になっちゃったのに、どうして？

「アンジェ？落ち着いて？私も同じだから。大丈夫だから。私もアンジェと同じ。血を啜った。私達をこんな体にしたあの男の……」

あの男？それよりも血を啜った？でも……私は……。

「大丈夫。アンジェリカちゃんは汚れてなんかいないよ？」

え？だれ？！
声に向かって、顔を上げると……天使が居た。

「て、天使……様？」

綺麗な銀色の髪に、透き通った翼。
私が見上げるとやさしく微笑んでくれた。

「アンジェリカちゃんは悪くないよ。悪いのはそんな身体にした人と、神様」

――神様?!天使様が神様の悪口って言って良いの?

「それはどういう事ですか?あの男は、まさか教会の人間なのですか?」

また少し怒った顔。お姉ちゃんは微笑んでいてほしいな。

「アンジェリカちゃんには、生まれる前の事で説明しなくちゃいけないことがあるんだ。でも、エヴァンジェリンちゃんだって、人事じゃないと思うの。……受け止められる?」

「はい、もちろん」

お姉ちゃん……。私、生まれる前の話はした事が無いんだよね。もうあんまりハッキリとは覚えて無いけれど、私が年齢だけならお姉ちゃんより上って事も……。

「でもこれは、残酷な現実。神様には良い神様も居るけれど、悪い神様も居る。今回の場合は悪い方ね。聞いてしまうと後戻りは出来なくなるよ?聞かないまま、生きていく事もできると思う。それでも――」

「お願いします!」

「アンジェ?!」

天使様が話を終わる前に、私はそう言ってしまった。

「お姉ちゃん。私ね、生まれる前の記憶がぼんやりとあるの。今と同じくらいの子供だったけれど、そこで生きていた時の……」

「アンジェ……」

「もうほとんど覚えていないけど、お姉ちゃんの事は大好きだから。もう、隠したくないの……」

怖かった。失ってしまう事が。ただ1人残った私の家族。
だから、正直に話してしまった。

「アンジェ。アンジェが何だろうと、私達は姉妹だよ。私はお姉ちゃんだから。必ずアンジェを守るってずっと昔から決めてる。私もアンジェが大好きだから。私に守らせて……。」
「うん！でも、私もお姉ちゃんが大好き！だから私にも守らせて！」
良かった！お姉ちゃんは私のこと嫌いにならないで居てくれた！
「えぇっと……感動的なシーンで、申し訳ないんだけれど～……」
あ……！天使様困らせちゃった！

――黒の森上空。

まさか、空を飛ぶ日が来るとは思っていなかった。
あの後、とりあえず自分の家に来てほしいと言った天使様の声に従って、アンジェと2人で天使様の身体にしがみついている。バッグや大きな荷物を色々と持っていたようで、私達が抱きつかないと移動に困ると言っていた。
そうしている内に、森の中に降り立った。
「家ってここですか？森ですよね？」

随分と奥深くの様だが、ただの森にしか見えない。
アンジェも不思議に思ったのか、キョロキョロとしている。

「うん、ここに封印してあるからね～」

そう言うと抱えていた荷物を地面に置き、少し歩いて何かを探している様子だった。

「あったあった。さすがに２６０年以上経ったら、土に埋もれてるよね！」

――２６０年？！
アンジェも驚いた様子で、天使様を見ている。

「封印解除っと」

そう言って地面から何かを引き抜く。
その瞬間、目の前に小さな家が現れた！

「なっ……！」
「すご～～い！」

――確かに凄い。
こんな森の奥に、見たことも無い形の家があるなんて誰が想像出来るだろうか。

「中にバスルームがあるから、２人ともとりあえず綺麗にした方が良いと思うんだ？」
「「あっ……！」」

確かに私達の格好は酷い。
天使様の勧めで、２人でお湯を張った浴場を借りる事にした。

第２０話　もう１つの闇（後書き）

２０話目終了。

第２１話　大好きなあなたへ（前書き）

連投はここまでになります。

第２１話　大好きなあなたへ

「それで天使様、アンジェの事と神様と、残酷な現実って何ですか？」

湯浴みから上がった私は、天使様にそう問いかけた。

……正直、想像が付かない。

私達をこんな体にしたのは神様のせいだとでも言うのだろうか？

「そうだね、まず、これを見てほしい」

――そう言って見せてきた本を見て絶句してしまった。

【『セフィロト・キー』の適応完了】

・転生時の枷『真祖に転化後は理性封印』を解除しました。

※以下は上位神による初期設定により変更不可能です。

・名前　アンジェリカ・マクダウェル

・種族　真祖の吸血鬼　女性

・転生特典

一緒に居る事も出来る姉。

・真祖の魔力
吸血鬼の能力。
太陽光、流水、十字架などといった弱点が無効化される。

「これは……何？」
「傲慢な神様の悪ふざけ……だよ」

腸が煮えくり返る思いだ。吸血鬼になる事が決まっていた？アンジェが？しかも理性を失う事を神が決め付けただなんて……。
それを見たアンジェは不安そうな顔をして口を開いた。

「あの、あの時の神様って、家族が欲しかった私の願いを叶えたんじゃないんですか？」
「うん、それは間違いないよ。ただし、曲解したり枷を付けたりとか、悪意を持ってね」

悪意だと！しかも意図的に曲解する？！なるほど……確かにこの天使の言うように、神とやらは傲慢な様だ……。それじゃぁ、この天使は……？！

「先に確認させてください。貴女は、その神の味方なのですか？私達を助けても良かったのですか？」

こんな所であの帝王学が役に立つとは皮肉だ。
精一杯怒気を押さえて、笑顔を貼り付ける。

「それは思うよね。信じてもらえないかもしれないけれど、私も、アンジェリカちゃんと同じ転生を経験した、元々はただの人間なんだ」

人間?!どう見ても天使だ。それに人間にしては顔も整いすぎている。

「うん、こっちのページを見てもらえるかな。あ、シルヴィアって私の名前ね」

そう言って自身の経験を語り、見せてもらったページを捲くっていく。

――しばらくして。

「とても……信じ切れないけれど、事実……なんですよね?」

「うん、そうだね」

「お姉ちゃん……」

安々とは信じられない内容だ。しかし彼女を否定するという事は、アンジェの出生を否定する事になる。何よりこの本、アンジェから離れたら、書かれていたアンジェの情報が消えたのだ。それに、城でアンジェに使った魔法の杖。あれでアンジェが正気に戻り、天使となった彼女まで目の前に居て、これで信じないわけにはいかなかった。

「分かりました。信じます。それで、シルヴィアさん。これで話は終わりですか?」

彼女には悪いけれど、天使様なんてもう言えなかった。アンジェは分からないが、神を傲慢と言い切った彼女なら分かってもらえる

だろう。

「……まだ、残酷な現実があるんだけれど……アンジェリカちゃんは、覚えてるかな？」

「はい……。この世界の事ですよね？」

何？アンジェは何か知っている？知っていて言えなかったほどの秘密？

……前世に関係があるのだろうか？

「言ってください。アンジェが知っていて私が知らない事。アンジェを失わないためにも、私は知りえる限りの知識と力が欲しい」

「アンジェリカちゃん……良い？」

「……はい！」

アンジェの瞳が覚悟を決めたような視線を送ってくる。

一体どんな……？！

「この世界は、ある物語を元に、さっき言った傲慢な神様が作った世界なんだよ」

……物語？例の傲慢な神が？

「それだけ？ですか？」

「え？驚いたり怒ったりしないのかな？」

「それでも私達は今、ここにこうして生きています。神が世界を作った。それは結局、他にどんな世界が有っても同じですよね？私としては、これ以上その神が何かしてこないかと言う方が心配です」

「あ、それは大丈夫。その神様はもう罪を罰せられて存在して居ないんだ。この世界は私の上司の女神様と私が管理してるって事にな

るみたい」

……。むしろ警戒するべきこの女か……！

「そ、そんな眼で睨まれても困っちゃうかな！」

「お姉ちゃん、助けてくれたんだから、睨んじゃダメだよ」

「それで……、その物語ってどんな内容なのですか？」

そうだ、この女が何かをするよりも、物語が元の世界ならば何かが起きるはず！危険が分かっていれば対処は出来る！

「うん、物語の開始は大体６００年後かな、西暦２００３年の初頭ね」

「「６００年？！」」

って、アンジェまで驚いてるのか！何でだ！

「待ってください！６００年も先なんて関係無いじゃないですか！」

「あるよ、あなた達不老不死だし」

「は……？！」

今なんと言った？不老不死？

「うん、不老不死。年はとらないし、死なないの」

「……ちなみに、シルヴィアさんの寿命は？」

「あまり考えたくないけれど、無いみたいなんだよね～」

何でそんな気楽に言えるんだ！

ま、まぁ、そうなるとアンジェと一緒に居る事は確定。

やはり問題はこの女か……！

「物語ではエヴァンジェリンちゃんは大きく関わるらしくって、絶対に居なくちゃいけない存在みたいなんだ。だからきっとアンジェリカちゃんも一緒に居るなら巻き込まれると思う」

……！巻き込まれる？！アンジェが私に？

……それでは一緒に居たら……アンジェは……。

「私はお姉ちゃんと一緒に居たいな」

「アンジェ？！」

私と居たい？！何か事件にこれから巻き込まれるかもしれない私と？！

「うん。大好きだから」

アンジェ……。

強くなろう。神にも負けない様に。誰よりも強くなろう。

傲慢な神の正義などに負けない！誰よりも誇り高い悪になろう！

――悔しいけれど、だから今は！

「お願いします！私に力を！魔法を教えてください！」

「うん、良いよ。それから、大きな事件は少しだけど情報があるから、一緒に確認して欲しいな」

良かった。時間はまだまだある。

未来まで、その先も私がアンジェを守りぬいてみせる！

第２１話　大好きなあなたへ（後書き）

この後は、数話分の話を書いてからキンクリして大戦記「赤き翼」になります。
あくまで原作が本命です。
それから、原作の雰囲気を大切にしたい為、変わった擬音や悲鳴など、コミカルなシーンも増えていきます。

第２１．５話　設定３（ネタバレ注意）

オリキャラ３の初期設定

名前：アンジェリカ・マクダウェル

誕生：１４００年頃生まれ（生前は１０歳）

性別：女性

身長：１３０ｃｍエヴァと同じ（生前は１２０ｃｍ）

体重：生前とほぼ同じ。（生前は２７ｋｇ）

種族：真祖の吸血鬼

枷：『真祖に転化後は理性封印』

【外見】

エヴァンジェリンの双子の妹。二卵性でやや茶髪で瞳も赤茶色。
エヴァと同様にロングヘアだが毛先にゆるいウェーブがかかっている。
目つきがエヴァよりも柔らかくでどこか幼い印象を受ける顔立ち。

【特徴】

家族を大事に思っている、典型的なお姉ちゃんっ子。
愛称は『アンジェ』。
エヴァには大切な妹として囲われるが、過保護はダメだと思いつつツンデレ。
立ち位置としてはエヴァの救いです。基本的に本編に大きな関わりは無いと思ってください。

【能力】

・真祖の魔力
言葉通りの吸血鬼の能力。
太陽光、流水、十字架などといった弱点が無効化される。

・転生特典
『家族に会いたい』を結果的に『一緒に居る事も出来る姉』に曲げた。
『ネギま！』に関しての記憶を読んだ神は、原作知識が3巻まであったためエヴァンジェリンの妹にした。

また、生まれる前後にシルヴィアの本に情報が載らなかったのは、『枷』の発動が転化後に指定されていたため。

第２１．５話　設定３（ネタバレ注意）（後書き）

１／１０（火）、誤字を修正しました。

第２２話　修行と現実（前書き）

キャラクターの会話や描写も増えた事で、１話が長い話が増えていくと思います。

第２２話　修行と現実

――あれから数ヵ月後。

「リク・ラク　ラ・ラック　ライラック　闇の精霊２７柱！集い来たりて敵を射て！魔法の射手！闇の２７矢！」

エヴァちゃんが空に向けて魔法の射手を唱える。しかし保護結界に当たって霧散して消えた。

「う～ん。魔法は出来てるけど、ただ使ってるだけだね。もうちょっとどんな風になって欲しいかイメージした方が良いかな。あと密度も低いと思うよ」

「ハイ……」

微妙に納得していないのかな？

あれから2人に魔法を教えながら、黒の森の私の家で生活してます。

ベッドは一人用だったので町で注文しました。隠蔽と認識阻害の魔法を使ってダイオラマ球へ。その後は家のベッドルームで出しました。2人の食料もその時に私が町で買ってきたんだけれど、全然食べない私に文句を言われて再びお茶会をする事に。

今は2人の魔法の練習を見ています。得意な属性は氷と闇で、双子だけあってまったく同じ。何かの時の為に、それ以外の属性も2人で別々に練習するそうです。

「シルヴィアは近接は苦手なんだろう？近づかれた時はどうしてるんだ？」

そう……エヴァちゃんからいつの間にか呼び捨てにされてました……。

私、何かしたかな？あれから呼び方が酷くなってる気がする！

悔しいのでエヴァちゃんって言ったら、難しい顔をしたけれど文句を言いませんでした。そのままアンジェちゃんって言ったら怒られました！理不尽です！

アンジェちゃんが「良いですよ～」って、言ったら渋った顔をしながらも文句は言わなくなりました……。

「えっと、私の場合は光の障壁や楯を瞬間発動出来るから、あまり問題になった事は無いかな。一応、昔会った魔法部隊の隊長さんに近接格闘は習ったから練習はしてるんだけど、なかなか上達しなくて……」

デルタ隊長さん達の事は忘れられません。もちろん結界の楔になっていたダガーは大切に保管してあります。宝物ですね！

「それじゃぁあまり参考にならないな」

「それならあっちの人を今度呼んでみようか？」

「あっち？」

「うん、メルディアナ魔法学校の先生とかシスター。後は魔法世界≪ムンドゥス・マギクス≫の魔法兵とか騎士団とか？」

体術は得意じゃないのは確かだからね。そういえばフロウくんは得意だったと思うけれど、どうしてるのかな？

「天使様のお前はともかく、吸血鬼の私達がそんな表の場所に行って良いのか？」
「あ……」

そっか、教会関係者が見たら、絶好の魔女狩りの対象？
あれ？というか、私の立場的に助けてよかったのかな？
でももう助けちゃったし、見捨てたりはしないよ？！

「そっか～……。じゃぁやっぱり、個人的な知り合いとかを頼る方が良いかな？」
「そんなやつが居るのか？」
「うん、今度メルディアナに行って、手紙を送ってもらう事にするよ」

――さらに数ヵ月後。

コンコン

「あれ？」
「こんな森の奥に客なんて来るのか？」

コンコン

もしかしてフロウくんが来たのかな？
まさか魔女狩り関係じゃないよね？昔来たし……。

「出ないんですか？」
「出るよ。けれど誰か分からないから、警戒はしていてね？」
一応、防御魔法の準備を意識する。
気を引き締めて、ドアを明けると――！
「ひどいですわお姉さまー！メルディアナから手紙なんて送らずに、会いに来てくだされば良かったのに！」
え……？誰……？
ドアを開けるなり抱きついてきた少女を見る。
新緑色の髪。同じ色の瞳。薄く化粧をして、物凄いフリフリのドレスを着たフロウくんが……って！
「な、何してるの？！」
「まぁ、お姉さま。そんな声を上げて。遥々会いに来ましたのに、酷いですわ」
だ……誰こんな風に躾たのは？！シスター達？！
何だか別人になって無いかな？！
「な、何だシルヴィアその女は……」
「わ～、可愛い～」
その気持ちは分かるよエヴァちゃん……。
確かに可愛いよ？！可愛いけれど、どうしてこんな風になったの？！
「あら、真祖の吸血鬼と言うからどのような方かと思いましたけれ

ど、随分と弱そうですわね」
「なんだと？！」
ちょっと待って！何でいきなり喧嘩腰なの？！
エヴァちゃんはプライドが高いから、そういう言い方はダメだよ！
「これでは一般兵でも勝ててしまうではなくて？お姉さまが鍛えるまでもありませんわ」
「なっ！ふざけるなー！」
激昂したエヴァちゃんが吸血鬼のスピードで突撃していく。
まずい！止めないと！
「エヴァちゃん？！まって――」
その瞬間、フロウくんは突撃してきたエヴァちゃんの右手首を掴むと、そのまま重心を崩し、うつ伏せにしてあっさりと組み敷いてしまった。
「なっ――？！」
「お姉ちゃん？！」
「フロウくん？！」
あれって、気を込めてるよね？
今のエヴァちゃんじゃ手も足も出ない！やりすぎだよ！
「ふーん、こんなものか。やっぱり成り立てだからか、力がまったく使えて無いな。」
「な、何……？！」
「え？！」

フロウくんの口調が戻ってる……。もしかして演技？！

「相手の見た目に騙されて、口車にもあっさり。これじゃ守るものも守れないぞ？」

ごめんなさい。私も騙されました……。

あ～……。エヴァちゃんは愕然とした顔をしてるね。正論過ぎるのもきついんだよ？

アンジェちゃんもショックを受けてるみたい……。

「性格変わりすぎです！せっかく可愛い人が遊びに来たって思ったのに！」

アンジェちゃんそっちなの？！

「それからシルヴィア。世界樹の件を忘れてるよな？」

「あ……！」

しまった、エヴァちゃん達の修行ばかり考えて、すっかり忘れてたよ……。

「戦国時代が近づいてくると、全国で厄介ごとが増えるだろう。それまでには行っておいた方が良いと思うぞ」

はい……そうですね。それはともかく……。

「クロウくん、そろそろ離してあげてくれないかな？」

「あぁ、良いよ。現実も分かったみたいだしな」

「それで……この女は何なんだ？」

うわー、明らかにエヴァちゃんの機嫌が悪い……。

「俺はフロウ。こう見えてもドラゴン種だ。よろしくな？」

そう言うとフロウくんの頭から、天に向かって後ろ斜めに突き出た1対の角が生えて、竜の翼を広げて尻尾も生える。

「――？！」

「わ～。凄いね～」

まさか、フロウくんはエヴァちゃんを驚かしに来たの？どうしてこんな子に……。アンジェちゃんはうろたえないなぁ～。

「それから俺は男だ。見た目はこんなんだが、間違えるなよ？」

「うが……。貴様変態か……」

「でも可愛いよ？」

やっぱり驚かして喜んでる。アンジェちゃんって可愛いものに目が無いのかな？

「嘘だ。実は女だよ。男だけどな！」

「どっちだ貴様は！」

あぁ……。あんなに良い笑顔をして……。フロウくんはどこか遠くへ行ってしまいました。

「それでシルヴィア！本当に何なんだこの女は！」

「あ～……うん。転生者だよ。私やアンジェちゃんと同じ」

「え？そうなの？！」

「あぁ、魔法世界≪ムンドゥス・マギクス≫で死にかけの所を助けてもらった。そのまま色々世話になってるよ」

……それにしても。こんな登場をしなくても良いと思うんだ。普通に来て普通に話をすれば良いと思うんだけれど……。

「シルヴィアからの手紙には、エヴァンジェリンとアンジェリカがお互いを守り生き抜くための力を求めて居るって書いてあった。俺はこんな容姿だからな。使えるものは使う。油断しただろう？相手の実力が分からずに突っかかって、俺が教えていなかったらもう終わってた。力を付けるのも良いが、眼も養った方が良い。真祖って言ってもコントロールが出来て無いんじゃ、シルヴィアみたいに出鱈目な魔力馬鹿とやりあうどころか、本当に一般兵に負ける」

シルヴィアの不安を他所に、フロウは淡々と言葉を述べていく。

「良い経験になったんじゃないか？」

「ぐ……！」

エヴァちゃん黙り込んじゃったね……。でもこれはちょっと……。

「フロウくん。言い方ってものがあると思うんだ。もっと普通に教えたら良いと思うよ？」

「俺やお前なら問題ないんだよ。二人の立場がヤバイ。隠蔽術や認識阻害を覚えれば一般人やそれなりの実力者は誤魔化せる。だがいきなり本物に出会ったらどうする？だからこういう状況が1番解り易い」

う……。そう言われるとそうかも。

「しばらくここで色々教えてやるよ。魔法や体術もある程度教えられる。だからシルヴィアは世界樹を見に行って来てくれ」
「うん、それは良いんだけど喧嘩しないでね？それからあっちは大丈夫なの？」
「シスター達がいるから問題ない。色々と準備もしてある」

引っかかるけれど、大丈夫って言うなら大丈夫……なんだよね？

「世界樹って何だ？」
「学校だよお姉ちゃん」
「まだ無いけどな」

そっか、原作知識も交換しておかないとね。

「例の６００年後と言うやつで良いのか？」
「あぁ、そうだ。それまでに本物の実力者になってもらわないと困る」
「なる。なってみせる！」
「私もお姉ちゃんの事守れるようになりたい！」

この調子なら大丈夫だよね？エヴァちゃんの眼にあの時の色が戻って来てる。
アンジェちゃんも、エヴァちゃんの事を大切に思って居るから頑張れそう。

「じゃぁそういう訳だから、シルヴィアはさっさと行って来い。終わったらまたこっちに戻ってきて手伝ってくれよ」
「じゃぁ2人とも、フロウと頑張ってね？」
「分かった」
「はーい」

姉として、守る者として決意のある言葉を述べるエヴァだった。

第２２話　修行と現実（後書き）

２２話目終了。

現在、対「赤き翼」を書いていますが、戦闘描写って難しいですね

…（汗）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1560ba/

青と赤の神造世界

2012年1月12日19時34分発行